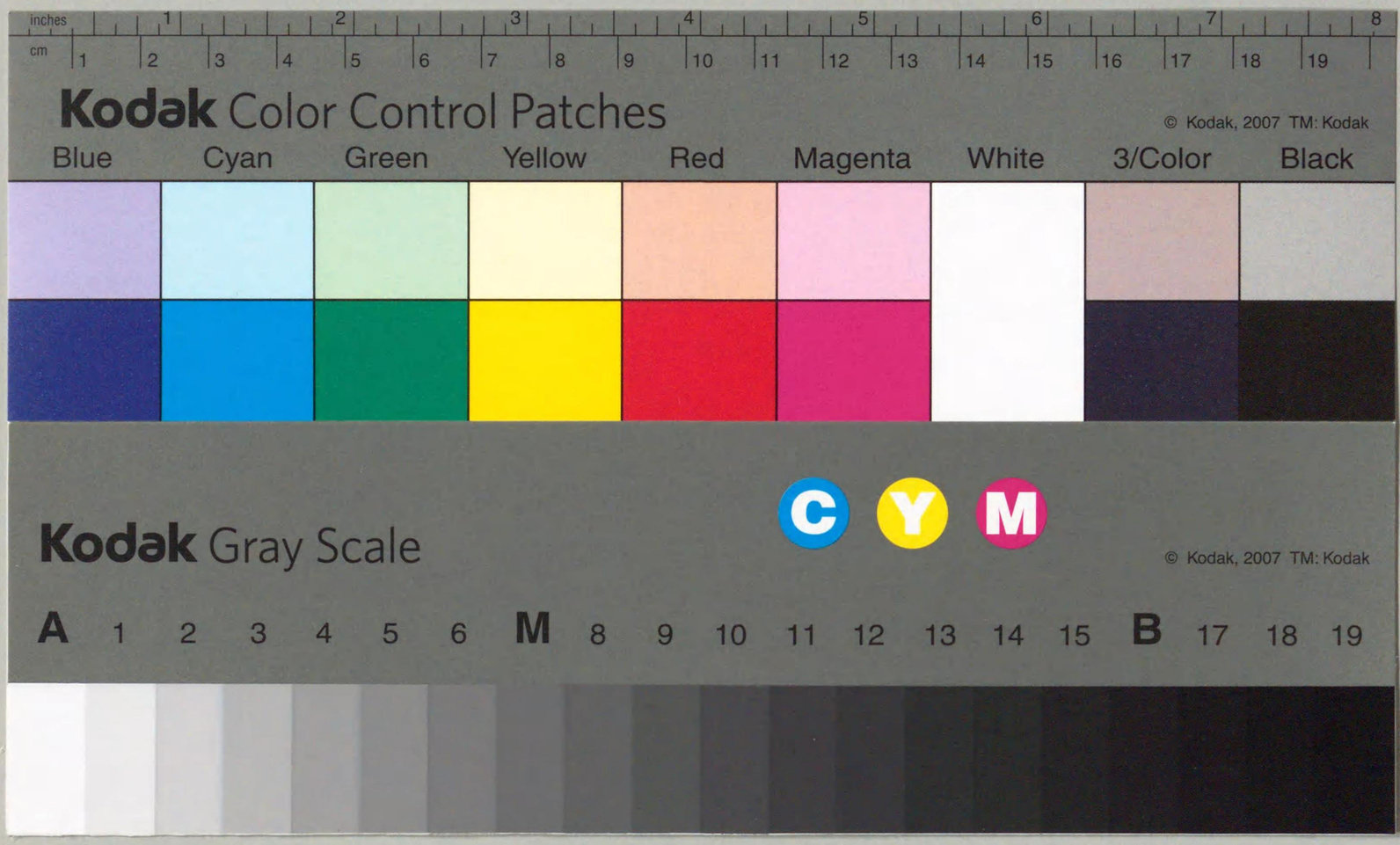


特46-810
1200500894618
特46
810

少年日露戦史
4 南山の巻

国立国会図書館

巖谷小波編

少年日露戰史

第四編

南山の巻

附

軍國讀本第四

220
579

博文館發行

特46
810

巖谷小波編

少年日露戰史

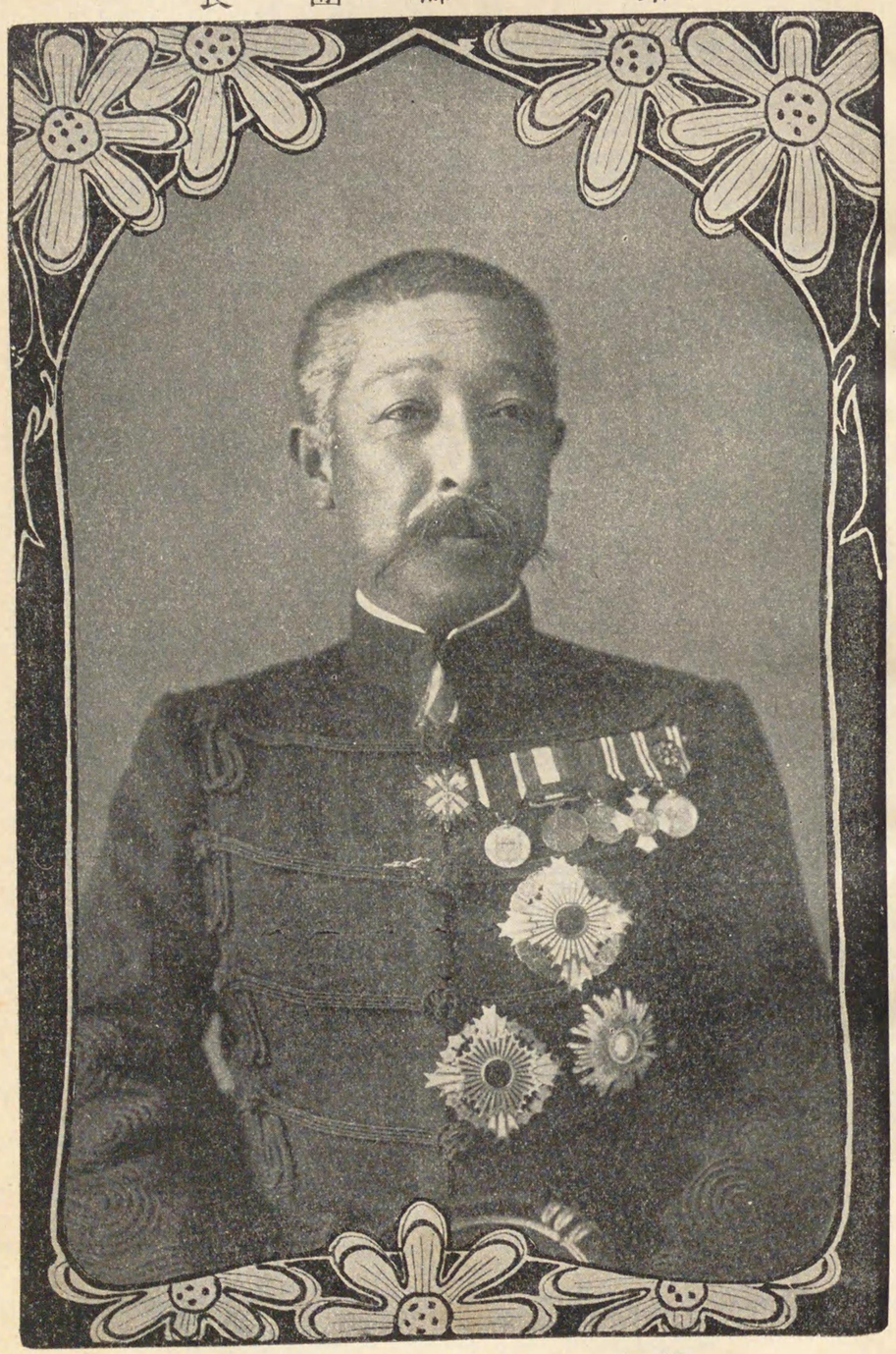
第四編 南山の卷

附 軍國讀本 卷の四

東京 博文館

明治
37 9 19
内交

第一師團長



伏見宮貞愛親王殿下

凡例

一少年日露戰史は、今の少年の爲めばかりで無く、今から後の少年の爲めにも、帝國空前の大事業を永く記憶させる爲めに、日露の戰爭を書いた本であります。

一附錄軍國讀本は、日露戰爭に干係した、美談や逸事を讀本體に書いて、忠君愛國の好模範を、永く少年に示す爲めの本であります。

少年日露戰史 第四編

南山の卷目次

口畫

第一師團長●第二軍司令官●第二軍司令部の出發●我軍上陸の困難

本文

第一章 第三回の閉塞……一
第二章 閉塞の成功……七
第三章 上陸の困難……一三
第四章 普蘭店の鐵道破壞……一七
第五章 大戰前の小衝突……二三
第六章 金州の占領……二八
第七章 南山の大激戰……三四
第八章 南山の占領……四一
第九章 第二軍の名將……四八
第十章 青泥窪占領の奇功……五四
第十一章 大連灣の掃海……五八
第十二章 嗚呼吉野、初瀨……六四

附錄 軍國讀本 卷の四

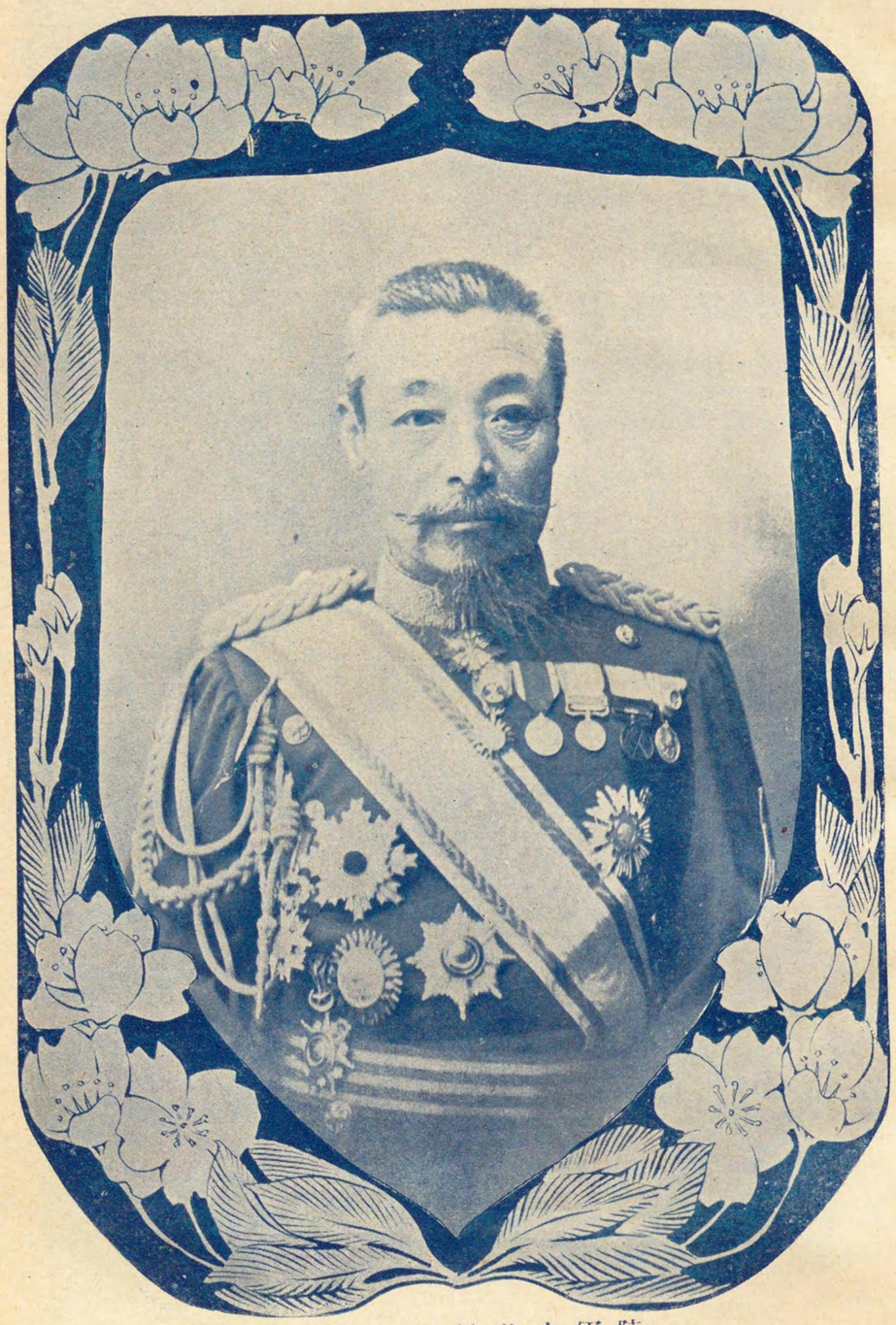
目次

一 南山攻擊……一
二 伏見宮殿下の御武德……六
三 鳥海艦長……一三
四 勇猛士官……一七
五 宮本武藏の末孫……二二
六 苦戰の聯隊……二三
七 友愛の嬉涙……二五
八 決死の志願……二八

挿畫

▲第三回閉塞隊の猛戰……四
▲第二、三回閉塞船の位置……一一
▲鐵道の破壞……一八
▲金州城門の破壞……三〇
▲雷雨中の進軍……三六
▲鐵條網の慘狀……四二
▲南山攻擊の地圖……四七
▲金州灣に於ける海軍の應援隊……五〇
▲第四師團の突貫……六二
▲伏見宮殿下の御元氣……七
▲林中佐の戰死……一四
▲白石少佐の勇猛……一九
▲小原聯隊の苦戰……二四
▲決死の志願……二九

第二軍司令官



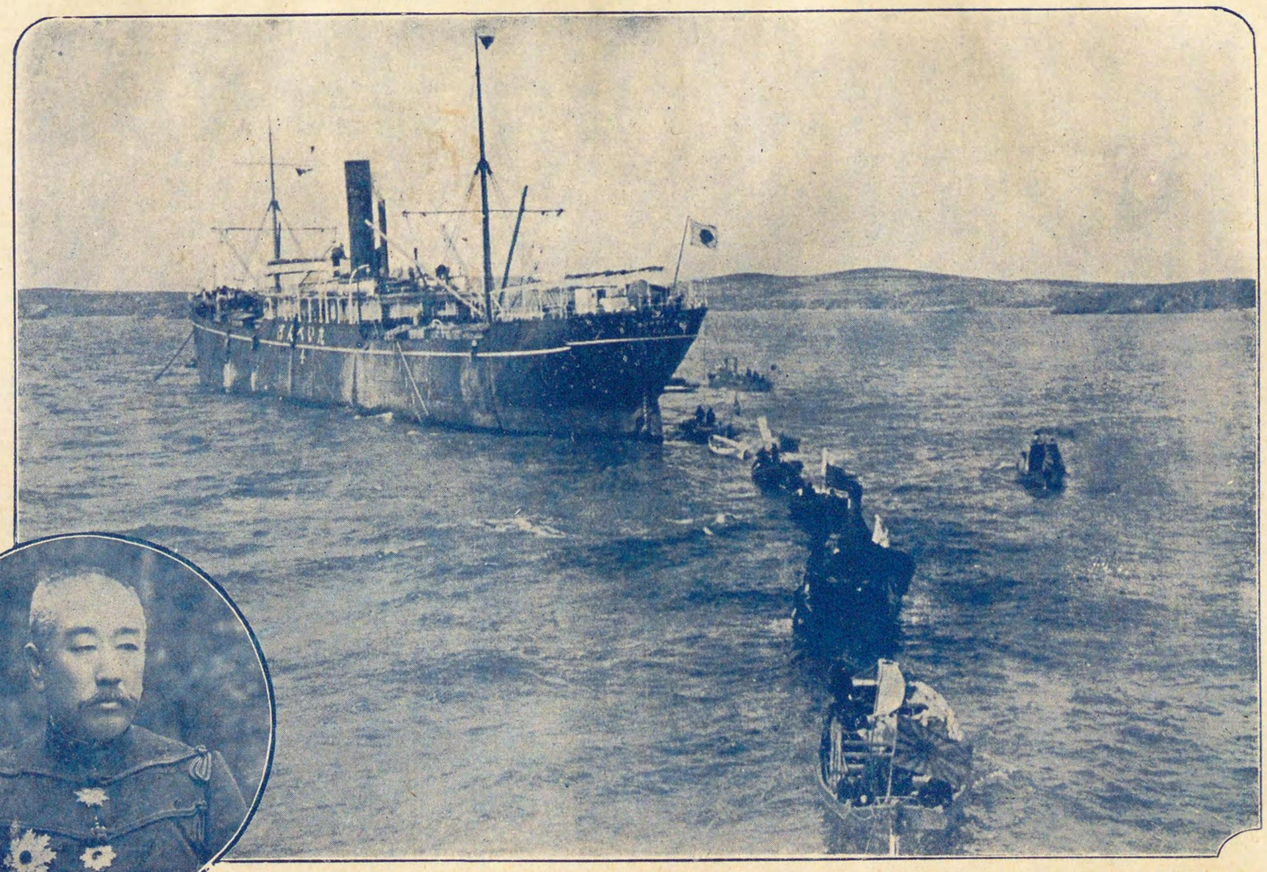
陸軍大將男爵奥保鞏

小川第四師團長

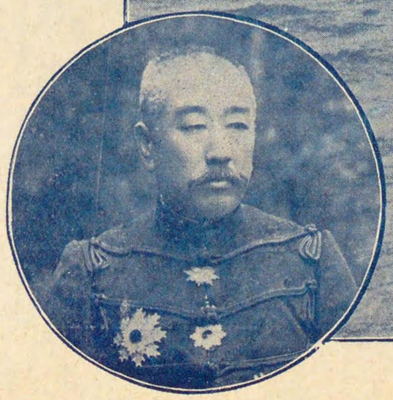
第二軍司令部の出發

（金州半島）

我軍上陸の困難



（鹽大澳）



大島第三師團長

少年日露戦史

第四編 南山の巻

第一章 第三回の閉塞

巖谷小波編

第二軍奥大将
伏見宮殿下
大島中將
小川中將

第三回閉塞

さても我が第二軍は、陸軍大將男爵、奥保鞏を司令官に頂き、恐多くも伏見宮殿下を初めとし、大島(義昌)小川(又次)の三中將の下に、第一、第三、第四の、三箇師團の大軍と成つて、四月中旬に宇品を發し、越へて五月五日には、遼東半島の南の方、貔子窩と云ふ所の側から、盛んに上陸を

三度目の正直

第三回の閉塞

初めました。

が、その上陸の事を記す前に、此所に何うしても書かねば成らぬ事があります。それは他でもありません。已に二度までも試みた、旅順口の閉塞を、今一度行ひまして、所謂る三度目の正直に、見事成功させたと云ふ、我が海軍の功績であります。

一體この旅順口を、何故閉塞せねば成らぬかと云ふ事は、已に決死隊の巻に於いて、委しく書いた通りでありますが、この第二軍の進撃するに當つて、又もやこれを行つたと云ふのは、全く斯うして敵の軍艦を封じ込め、その間に大勢の陸兵を、易々と上陸させる爲めでありました。さればこの大役に當つた、第三回の閉塞隊は、

五月一日

五月三日

三河丸　匝瑳大尉
遠江丸　佐
本田少佐
江戸丸　佐
高柳少佐
愛國丸　佐
犬塚大尉
佐倉丸　佐
白石少佐
小樽丸　佐
野村少佐
朝顔丸　佐
向少佐
相模丸　佐
湯淺少佐
新發田丸
林中佐
遠矢參謀

を以て根據地を發し、三日にはもう旅順口に達して、この大事業を仕遂げたのでありますが、その時は前の二度と異つて、船も八艘と云ふ大仕掛、總指揮官には中佐林三子雄が、新たに選ばれて之に當り、また各船の指揮官には、三河丸に大尉匝瑳胤次、遠江丸に少佐本田親民、江戸丸に少佐高柳直夫、愛國丸に大尉犬塚太郎、佐倉丸に少佐白石葭江、小樽丸に少佐野村勉、朝顔丸に少佐向菊太郎、相模丸に少佐湯淺竹次郎など、それ〴〵屈竟の部下を率ゐて、その任に當つたのでありますが、

尤も初めは十二艘の筈で、林中佐は自ら新發田丸に乘り組み、參謀大尉遠矢勇之助とともに、總隊の指揮をして居たのでありますが、生憎五月二日の夜、俄かに風が劇しく

第三回閉塞隊の猛戰

第三回の閉塞

第一章

機關を損ず

風波の爲め閉塞の見合せ

號令不通

吹き初め、浪が山の如く起りまして、途中が非常に困難に成り、今まで一列に進んで行つたのが、ちり〳〵に吹き分けられて、互ひに影を見失つて了ひ、その中に新發田丸は、機關を損じて思ふ樣に動けなく成りました。

思ひがけないこの不幸に、林總指揮官は、切齒をして悔しがりましたが、なまじこんな時に無理に行つて、大切の計畫を仕損じては、何の役にも立たないと、遠矢參謀にも相談の上、援護の爲めについて來た、赤城艦の信號を借りて、『今日の閉塞は見合はせる』と云ふ事を、總隊の船に傳へたのであります。

所が丁度此時は、風と浪とに阻てられて、船が離れ〳〵に成つて居たものですから、折角の號令が總隊に屆かず、

閉塞の成功

死ぬ斗りが軍人の目的で無い

林中佐の指揮に從ひ、此所から引返へしてしまつたのは、新發田丸と他三艘だけで、殘る八艘の閉塞船は、その儘風を切り、浪を破つて、旅順口へと向ひました。

第二章　閉塞の成功

元より閉塞と云ふ大役を引うけるからには、誰も生きて還らうとは思ひません。さればこそ世間では、この事業に當る勇士を、決死隊と名づけた位ですが、さうかと云つてこの事業は、元と港口を閉ぐのが趣意で、死ぬ斗りが決して、『今度の任務と云ふものは、實に重いものであるから、部下の者を誡めま

閉塞の成功

三河丸の先登

無益に只死ぬ事のみ急いで、大切な任務を忘れる様では成らんぞ。』と、注意に注意を與へて居りましたが、何分船は古船で、機關も丈夫でありませんから、かう云ふ風波に出會ひますと、思ふ様に働く事が出來ず、遂に初めの手筈も狂つて、各自が思ひ〳〵に、突進しなければ成らぬ事になりました。

で、列も亂れてしまひましたから、今まで四番目に進んで居た、匝瑳大尉の三河丸は、一番先に進んで行つて、今までの閉塞船の、一つも入つた事の無いほど、奥まで入つてしまひました。

次いで本田少佐の遠江丸、高柳少佐の江戸丸、野村少佐の小樽丸、湯淺少佐の相模丸の四艘は、港口まで行きまし

レトウ井ザンの機關砲防材

たが、何しろ此時は、敵も二度の閉塞に懲りて、兩岸の大砲を增し、淺瀨に居据りのレトウ井ザンには、特に機關砲を備へ、港の口には防材を設け、また水雷を沈めて置いて、十分に防備をしてありましたから、この中を進んで行く閉塞隊は、まるで火の海に飛込んだと、少しも差異はありません。

また白石少佐の佐倉丸、犬塚大尉の愛國丸、向少佐の朝顏丸は、前の五艘と少し離れて、港の外に沈んでしまひました。

此時不思議であつたのは、一番奥深く進んで行つた、匝瑳大尉が却つて無事に引あげ、却つて其次に行つた高柳少佐が、防材の手前で爆沈する前に、敵彈に中つて戰死しま

閉塞の成功

生死不明

した。

また殘念でありましたのは、只に戰死の多かつた斗りで無く、野村少佐の小樽丸、向少佐の朝顏丸、湯淺少佐の相模丸等は、乘組殘らず行方が知れず、其他犬塚大尉、白石少佐、靑木大機關士など、將校初め下士卒の、生死も判然しないのが、實に少からぬ事であります。

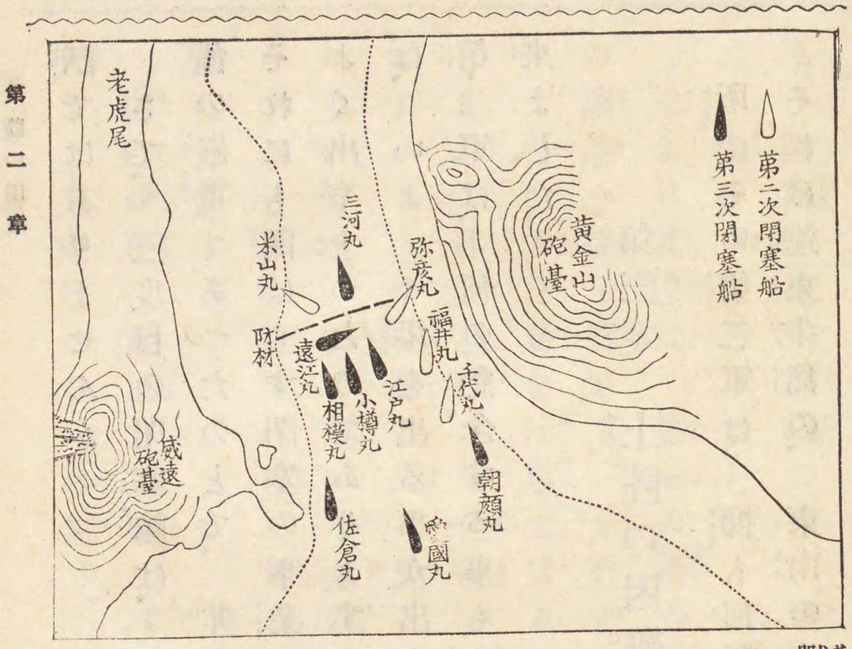
これは何故この通りに、生死の解らぬのがあつたかと云ふと、何分天氣が惡く、風波が劇しかつた爲めに、折角隊員收容の爲めに、水雷艇や驅逐艇が、澤山付いて行つたのも、十分に役に立たなかつた故でした。

後で考へて見ると、此時生死不明であつた人達は、大方陸へ泳ぎつき、それから敵の砲臺へ斬り込んで、花々しく

壯烈の極

九死一生

聾に成る



戰死を遂げたらうと云ふことです。

この一事を聞いても、今度の閉塞隊の行動が、何程壯烈であつたかゞ解りませう。また此大事業に參かつて、九死の中から一生を得、漸く無事に歸つて來た人の中には、其時あまり砲彈を浴びせられ、劇しい響きを聞かせられた爲めに、まるで聾に成つた者もある位です。なんと恐ろしい

上陸の困難

貔子窩

話ではありませんか。

さて、三度目の閉塞隊は、天氣の惡かつたのと、敵の防備の嚴重であつたのとで、非常に澤山の人を失ひましたが、それにも關はらず閉塞の事業は、殆んど申分の無い迄に、よく出來上つたのであります。これに依つて敵の艦隊は、いよ〳〵港を出る事が出來ず、これに依つてまた我が第二軍は、何の懸念する事も無く、大手を振つて上陸が出來ました。

第三章　上陸の困難

所でその第二軍は、抑も何所から上陸しましたらう？それは遼東半島の、東南の岸にある、貔子窩と云ふ所から、西南へ五六里隔つた、鹽大澳と云ふ灣の中で、臺山と云ふ山の下でありました。

元より其邊は、船着の港が出來て居るのでは無く、普通の濱邊へ船を寄せて、それから陸へ上らうと云ふのですから、決して容易な仕事ではありません。

まして此の邊は、平生浪の荒い所で、汐の流れがまた急ですから、つひ鼻の先に見えて居る陸へ、船がなか〳〵着かないので、力の弱い小蒸汽や、小さな端艇などでは、動もすると汐に流されて、却つて沖の方へ出てしまふと云ふ仕末です。

塲所が已に此通り不便です。所を上がらうと云ふ者は、元より人間ばかりでは無く、馬もあれば大砲もあり、武器

鹽大澳臺山の下

湖流急なり

生憎の風波
五月五日
端午節句

上陸の困難

もあれば粮食もあり、それが三箇師團分と云ふ、非常な澤山な數ですから、これを皆運び上げる困難は、迚も筆には盡されない位です。

その上また生憎な事には、丁度その頃風が吹きつゞいて、只さへ荒い浪が、一層高く打つて居ますので、動もすると端艇を覆へされ、また馬を流されて、その爲めに五六匹の馬を、とう〳〵溺れさせてしまひました。

が、勇氣に充ち、忍耐に富んで居る我が軍は、このあらゆる困難を排して、五月五日から三日ほどの間に、何萬人と云ふ大勢で、無事に上陸してしまひましたが、この五月五日と云ふ日は、日本では端午の節句と云つて、昔から尚武の祭をすると云ふ、誠に目出度い日なのであります。

細谷少將の第三戰隊
野元大佐の陸戰隊

その目出度い日に當つて、第二軍の勇將猛卒が、此所に首尾好く上陸したと云ふのは、何と云ふ目出度い事でありませう！

而もその上陸した地は、名にし負ふ遼東半島！　忘れもせぬこの土地は、十年前の干渉で、おめ〳〵支那へ還へしたのを、其後狡猾な露西亞が、さも我物顏に占めて居る所です。

して見ると此土地は、支那であつて支那で無く、敵國露西亞も同じ事であります。ですから我軍も、豫め用心の爲めに、細谷少將の率ゐて居る、第三戰隊の各艦が、上陸掩護の爲めに付き添ひ、また野元海軍大佐が、別に陸戰隊を引連れて、陸上の敵兵を追掃ふ爲めに、前以て陸へ押し上

香港丸
日本丸
千米突の間徒渉

がりましたが、その勢に恐れてか、敵はゝや逃げて影も見せず、其爲めにこの邊の土地は、鐵砲一發も放さぬ間に、見事我軍で占領してしまひ、その一番高い所へ、手早く日章旗を突立てゝ、天皇陛下の萬歳を唱へたのは、何と愉快な事ではありませんか。

尤もこの陸戰隊は、是より先佐世保を發し、香港丸日本丸に乘つて、特に此所まで向つて來たのですが、その上陸する時などは、とても端艇では漕ぎ着けないので、餘議なく皆海の中へ踏み込み、水の臍まで屆く位の所を、凡そ千米突(八町程)斗りの間、徒歩で押し渡つたと云ひますが、成る程この勇氣には、敵もまづ肝を冷やして、戰はない中に逃げてしまつたのも、決して無理で無いのであります。

第四章　普蘭店の鐵道破壞

かくて鹽太澳を上陸した、第二軍の先鋒隊は、直に此所から兩手に別かれ、一隊は貔子窩へ、一隊は普蘭店へと向ひました。

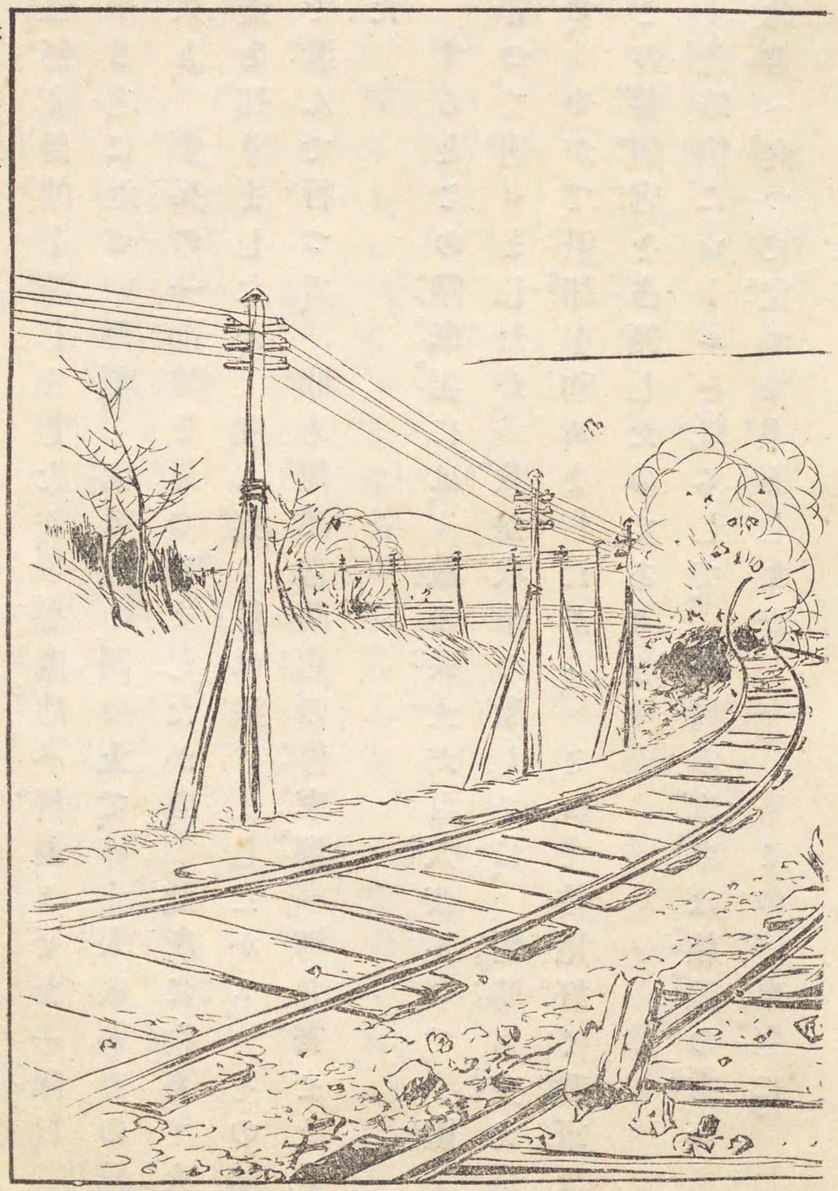
貔子窩は黃海に向つた町、普蘭店は遼東灣に沿ふた驛で、此所には旅順から露西亞の本國へ通ふ、鐵道の停車場もあり、共に敵には大切な所ですから、まづこの二ヶ所を衝き、電線を切り、鐵道を壞して、敵の力を削ぐ爲めなので、若しこれ等を斷ち切つてしまへば、それこそ旅順は孤立に成つて、とても十分の働きは出來ないのです。

で、貔子窩に向つた一隊は、敵の逃た後であつたので、

鐵道の破壞

普蘭店の鐵道破壞

第四章



普蘭店の鐵道破壊

初めて火蓋を切る

普蘭店の占領

難無く目的を達しましたが、普蘭店へ押しよせた一隊は、やゝ之に近づいた頃、南の方の岡の上で、十人ばかりの騎兵と、歩兵の一部隊を見つけましたから、此所に初めて火蓋を切りましたが、間も無く敵は逃げましたから、その勢で進んで行つて、間も無く普蘭店の停車場へ押し寄せました。

するとこの停車場には、敵の兵士が百人ばかりで、堅く守つて居りましたが、我が攻撃の激しさに、暫時も支え得ず、やがて退却を初めましたから、こゝで首尾好く我軍は、この普蘭店を占領したのであります。

此時俄にレールを軋らして、一列の汽車は旅順の方から、此方へ向つて走つて來ましたが、今しもこの停車場に、日

日章旗に一齊射撃

赤十字旗の濫用

射撃中止

章旗の高く翻へるのを見ますと、いきなりその窓から、一齊射撃を初めましたから、『何で我兵の猶豫しませう！』おのれ小癪な！』と云ひながら、銃口を揃へて激しく撃ちかけましたから、今度はその汽車の窓から、赤十字の旗を出して、頻りにこれを振り立てました。

元來赤十字の旗は、元より神聖な物として、如何なる亂戰の間にも、決して手を出さぬと云ふ、世界中の約束ですから、我軍はその約束を重んじて、一時射撃を中止したのです。

で、その汽車の近づくを待つて、一應これを檢めやうとしますと、こは如何にその汽車は、此方の油斷を見すまして、急にまた速力を增し、北をさして一散に、とう〳〵逃

アレキシーフ、ポリス大公の逃走

げて行つてしまひました。

さてはおめ〳〵詐されたかと、我軍は切齒をしながら、これを捕へやうとしましたが、如何に剛勇な日本兵も、汽車を追ふ足はありません。

後で考へて見ますと、彼の旅順口に立て籠つて居た、アレキシーフ總督は、我が手強い攻撃に、とても敵はぬと思つて、ポリス大公と云ふ親王と一所に、遼陽さして逃げ出したのは、丁度五月六日だと云ひますから、事によつたらこの兩人は、此時此汽車に乘つて居て、赤十字の旗を濫用し、まさ〳〵此所を逃げたのかも知れません。果してさうであつたとすれば、此時此汽車を逃がしたのは、殘念とも無念とも、實に云ひ樣がありません。

糸目の切れた紙鳶

大戰前の小衝突

それにつけても、敵の狡猾さ！卑怯さ！これでも歐羅巴の文明國と、自分で威張つて居るのですから、實に呆れるではありませんか。

で、この汽車を逃がしましたのは、如何にも殘念でありましたが、其後間も無く我が軍は、工兵隊の手を以て、鐵道を打ち壞わし、電線を斷ち切つてしまひましたから、これでいよ〳〵旅順口は、糸目の切れた紙鳶の、木の枝に掛つたと同し姿と成りました。今に大雨に打たれゝば、何で破れずに居られませう。

第五章　大戰前の小衝突

普蘭店の鐵道を、首尾好く破壞した後、更にまた一枝隊

三十里堡

桂中尉の戰死

瓦房店

を進めて、普蘭店と三十里堡の間にある、鐵道や電線などの、交通機關を破壞させました。

で、ぬこの枝隊は、五月八日に龍口と云ふ所まで來ました。これは三十里堡の東北、一里半ばかりの所ですが、此所に一生懸命に守つて居りましたから、敵兵が居て、一も百人斗りの朝の八時半から十一時まで、激しく戰ひました揚句、漸く敵を擊ち退けて、長さ半里斗りの所を、とう〳〵破壞してしまひました。が、此時の激戰で、步兵中尉桂勇喜を初め、下士以下三名は戰死し、九十九名は負傷をしましたから、其死骸を小高い山の上に埋めて、手厚く葬つて置きました。

それからまた十二日には、普蘭店の北六里ばかりの、瓦房店と云ふ所の、交通機關を破壞してしまひましたが、此間に其所や此所で、小衝突は幾度もありまして、やがて十六日には、金州城の北の方にある、十三里臺の敵を破つて、この高地を占領したのであります。

十三里臺

三時間の戰鬪

水谷少佐
小木谷大尉

一體金州城と云へば、彼の日淸戰爭の時にも、激しい戰のあつたので、其名のよく知れた所ですが、十三里臺はその手前にあつて、此城は大切な要害なのです。

さればこそ敵兵も、まづ此所に目を着けて、一生懸命にこゝを守りましたから、戰爭も隨つて激しく成り、正午過から四時頃まで、三時間あまりも擊ち合つた末、漸くこれを占領したのであります。

此時我軍では、砲兵少佐水谷喜三郎、步兵大尉小木谷好

板倉中尉菊地中尉

之助、砲兵中尉板倉光夫、同菊地勇熊など、何れも負傷をしたのでありますが、然し将校に戦死は無く、只下士以下の死者と傷者が、百四十六人ありました。

将校以下六人の捕虜

此通り、砲兵の将校に、多くの負傷の出來たのは、全く敵の砲兵陣地が、都合の好い所にあつた故で、我軍はその爲めに、少しは惱まされましたけれども、元より勇猛な士卒の働きで、遂にそれを撃ち破り、果は将校一人と、下士以下五人の捕虜を得、また少くも三百人以上を、斃し又傷けたのであります。

小野寺少尉他四名の戦死

その後又十九日には、省金山の北の方で、此所から逃げた敵と出會ひ、また三十分ほど戦つて、これを追掃つてしまひましたが、この時少尉小野寺福松は、部下の下士卒四

金州城南山の敵

名と共に、此所に名譽の戦死を遂げました。

かう云ふ風に、上陸後二週間ばかりの間は、大した戦争もありませんでしたが、その小衝突の間に、金州城の東北の、一帯の小高い所は、皆我軍の物になりましたから、これでこの金州城は、はや占領したも同し事に成りました。

尤も金州城と云ふ所は、廣い平地にある城ですから、戦争の場合こゝに立て籠るのは、あまり都合の好い所でありません。ですから日清戦争の時には、支那兵が大切に守つて居たのも、遂に破られたのでありますが、今度の露西亜兵は、流石に金州城ばかりは守りません。却つて城の南にある、南山と云ふ山に據つて、此所に十分の兵力を集めて居ります。されば此所で我と敵とは、金州城を間に置いて、

金州の占領

北と南の山の上に、相對して居る姿であります。

第六章　金州の占領

金州の占領

一體南山と云ふ山は、遼東半島の南の端で、別に金州半島と云はれて居る所の、左右海に狹まれて、まるで帶の樣に成つて居る間に、小高く聳へた所を云ふのです。

和尚島の砲壘

其幅一里ばかりの間、一體に山に成つて居て、道と云ふては只一筋、左には大連灣を扣へ、此所の和尚島に砲壘もあれば、また灣内には砲艦一隻を浮べた外に、機械水雷を幾個となく沈めてありますから、海軍が來て攻める事も出來ません。

また右手の金州灣は、常から遠淺の所ですから、大きな

半永久的

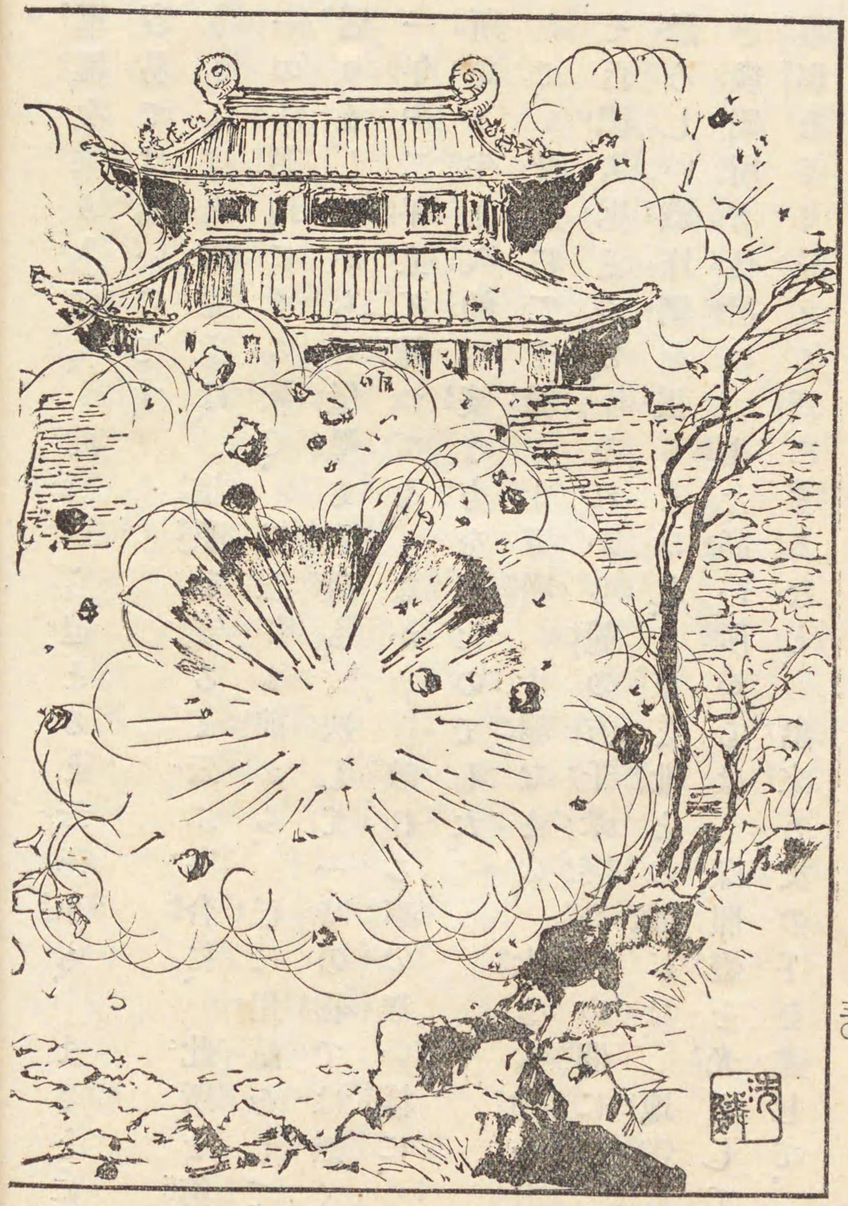
鐵條網
地雷火
探照燈

軍艦を乘り入れて、此所から迫まると云ふ事も、まことに容易では無いのです。

されば露西亞では、旅順を守ると云ふ場合に、此所を第一の防禦地にする氣で、二三年も前から、已に用意をして居りましたから、堡壘も砲臺も、決して一時の物では無く、一年や二年立て籠つても、なか〳〵破れる事の無い樣に、所謂る半永久的の築き方をしたのでした。

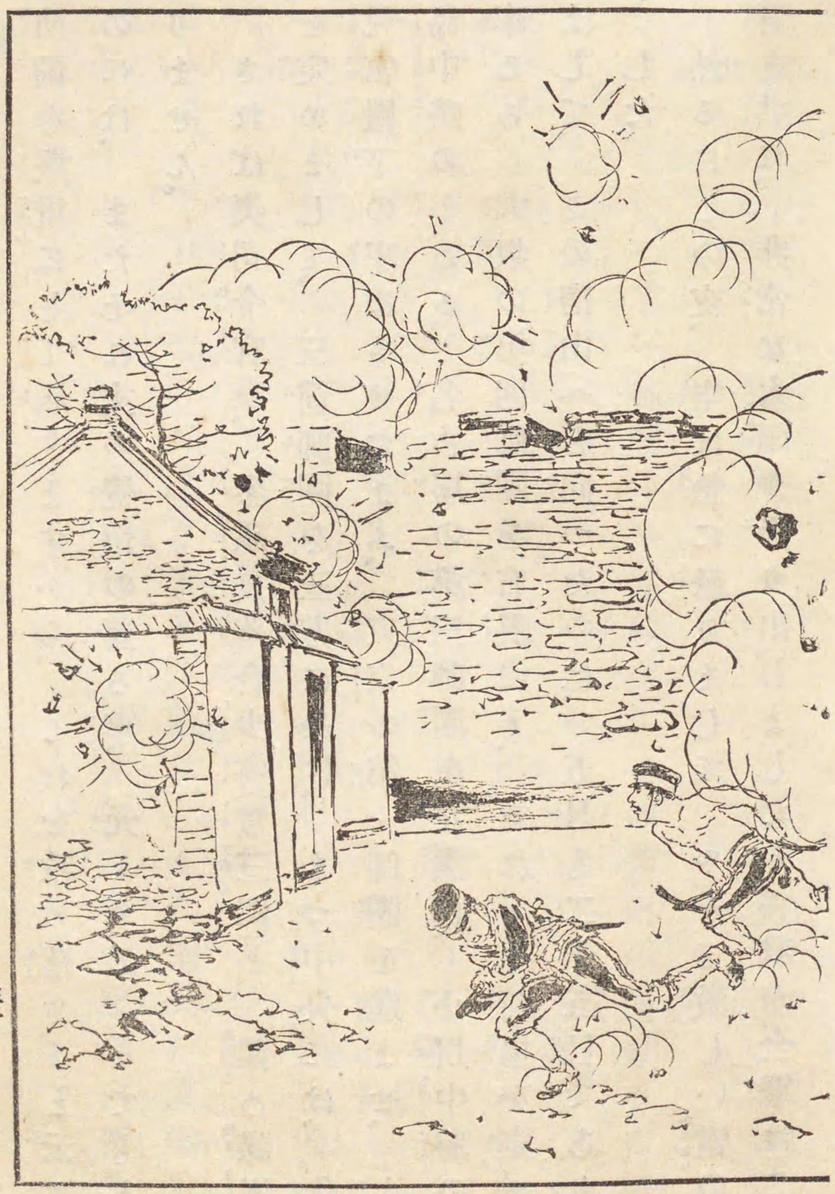
で、此所に二十珊、十五珊、十珊などの、大きな砲を凡そ百門も据ゑつけ、それから麓の方千米突斗りの間には、恐ろしい鐵條網を張りまはし、を幾個所も仕掛け、また高い所からは、探照燈を光らして、東と北との麓には、地雷火戰場をよく見える樣にするなど、出來る丈の手を盡して、

金州城門の破壊



金州の占領

第六章



落合參謀長
右翼第四師團
中軍第一師團
左翼第三師團
五月廿五日
夜に入り大雷雨

防備を嚴重にして居りますから、これを攻め落さうと云ふのには、またそれ丈の覺悟の要る事、元より云ふまでもありません。

されば奥司令官は、參謀長落合少將（豐三郎）と、豫め謀畧を定めまして、三箇師團を三方に分け、まづ中央には、伏見宮殿下の率ゐさせたまふ、東京の第一師團を進ませ、大島中將の率ゐる、名古屋の第三師團を左翼に、小川中將の率ゐる、大坂の第四師團を右翼にと、それ〴〵持場を定めまして、この南山へと向つたのは、五月も二十五日でありました。

然るにこの夜、空は急に曇りまして、やがて激しい雷の音と共に、非常な大雨が降り出しましたが、我が全軍はこの雷雨の中に、前進の命令をうけまして、勇み立つて進軍を初めました。

決死の工兵隊
金州城門破壞

その中に、第一師團の一部隊は、この雷雨の激しさに紛れて、金州城の方に向ひ、城外凡そ八百米突の所に、工兵隊の手を以つて、歩兵射撃の掩堡を築きましたが、まだそれでも飽き足らず、やがて朝の五時半、決死の工兵七八名斗りは、各々身輕に扮裝まして、手に〳〵綿火藥を携へ、そつと敵陣に忍び寄り、東と南の城門を、一時に打ち壞しましたから、歩兵隊はこの勢に乘つて、どつと城内へ衝い て入り、これに恐れて逃げまどふ敵は、また砲兵が追撃を喰はせ、かくしてこの金州城は、間も無く我が軍で占領してしまひました。

南山の大激戰
力づくの攻撃
南山の大激戰
內山少將の砲兵隊

殘るは南山の砲壘であります。が、此所は前にも云ふ通り、天然の要害の上に、人工の防備を十分加へ、その上地形が狹まつて居て、横へも裏へも廻はれない所ですから、如何に戰爭の上手な人でも、計畧の施しやうがありません。此上は只力づくで、是を撲ち潰さねば成らないのです。あ力づく！　我が軍はこの南山に向つて、果して如何なる力を揮ひましたらう？

第七章　南山の大激戰

その中に夜が明けましたら、雨も止み霧も晴れまして、今は南山の敵壘を、つひ鼻の先に見ましたから、まづ我砲兵隊は、內山少將の指揮の下に、一齊に砲火を開きますと、

敵速射砲の退却
銃戰効無し

敵も同じくこれに應へて、激しく彈を擊ち初め、その音の激しさは、昨夜の雷を千ほど束ねて、一度に落した位でしたが、その間凡そ三時斗り、午前十一時に成つて、敵の砲の一部分は、我が爲めに擊ち萎められ、また速射野砲の二中隊は、南山の後の方の、南關嶺まで引揚げましたが、それでも砲壘の中にある敵砲は、少しも痺む色は無く、相變らず彈を浴びせかけて、隨分我軍を苦めました

で、この砲の力ある間は、滅多に步兵は進まれません。しかも敵は高い所に搆へ、味方は低い所を進むのですから、先方の彈に効驗があつて、此方の銃は少しも役に立ちません。仕方が無しに物陰へ隱れて、少しでも敵に隙の出來るのを、只覗つて居るばかりであります。

雷雨中の進軍

南山の大激戰

第七章

南山の大激戰

損害を顧みず攻撃

その中に時刻は移つて、はや午後に成りましたが、まだ敵は少しも弱らず、遠い砲兵には砲彈を飛ばし、近い歩兵には速射砲を浴びせて、頻りに我軍を苦しめるばかり、此分ではこの南山は、どうしても落とす事が出來無いのかと、一時は危ぶまれる位でありました。

けれども勇敢なる奥大將は、『この第二軍の司令官として、此所に上陸後の第一戰を開いたのに、高の知れた南山一つ、攻め惱んだと云はれては、この大命を承まはつて來た、大元帥陛下に申譯が無いぞ。イデ此上は損害を顧みず、今日の中にこの山を、是非共攻め落してしまへ！』と、虎髯を逆立てゝ、言葉鋭く下知をしましたから、これを聞いた全軍の兵士は、一時に千人力を得た心地、『ヨシ、かう成つては

大房身大連灣の砲艦

命は入らんぞ、鐵條網も踏み破れ、地雷火なんぞも踏み潰せ！』と、勇み立つて突貫しました。

所が何しろその道には、砲彈銃丸雨霰と、隙間も無く擊ちかけられるのですから、十歩進めば五人擊たれ、二十歩進めば十人斃れ、見る〳〵中に死傷の數は、千人餘りに上りました。

またその砲火の雨を侵して、漸く麓近く進んだ者は、此所でまた鐵條網に掛かり、進みも退きも成らずに居りますので、此所へ、また彈丸を浴びせられますので、此所でもまた戰死した者が、非常な多人數に成つたのであります。

その中にまた敵は、大房身の砲兵陣地や、大連灣にある砲艦から、わが軍の左翼を目がけて、ズドン〳〵と擊ちか

聯隊旗手三度代る
聯隊長の負傷

けましたから、是が爲めに第三師團の兵は、此所で少からぬ損害を受けましたが、何しろ敵の砲のある所は、距離が隔つて居るものですから、此方の砲の彈は屆かず、何とも仕樣がありません。

またある聯隊の如きは、聯隊旗を眞先に立てゝ、勢鋭く進みます中に、旗手が三度まで擊たれて代り、聯隊長もその間に、遂に負傷をしたと云ひますから、その戰爭の激しさも、實に思ひやられるのであります。

斯くして我が第二軍は、死力を盡して攻め立てましたが、これでもまだ南山の敵は、容易に此所を棄てさうにも無く、その中に日は傾いて來ました。

さてはいよ〳〵力づくでも、この南山は落ちないのでせうか？

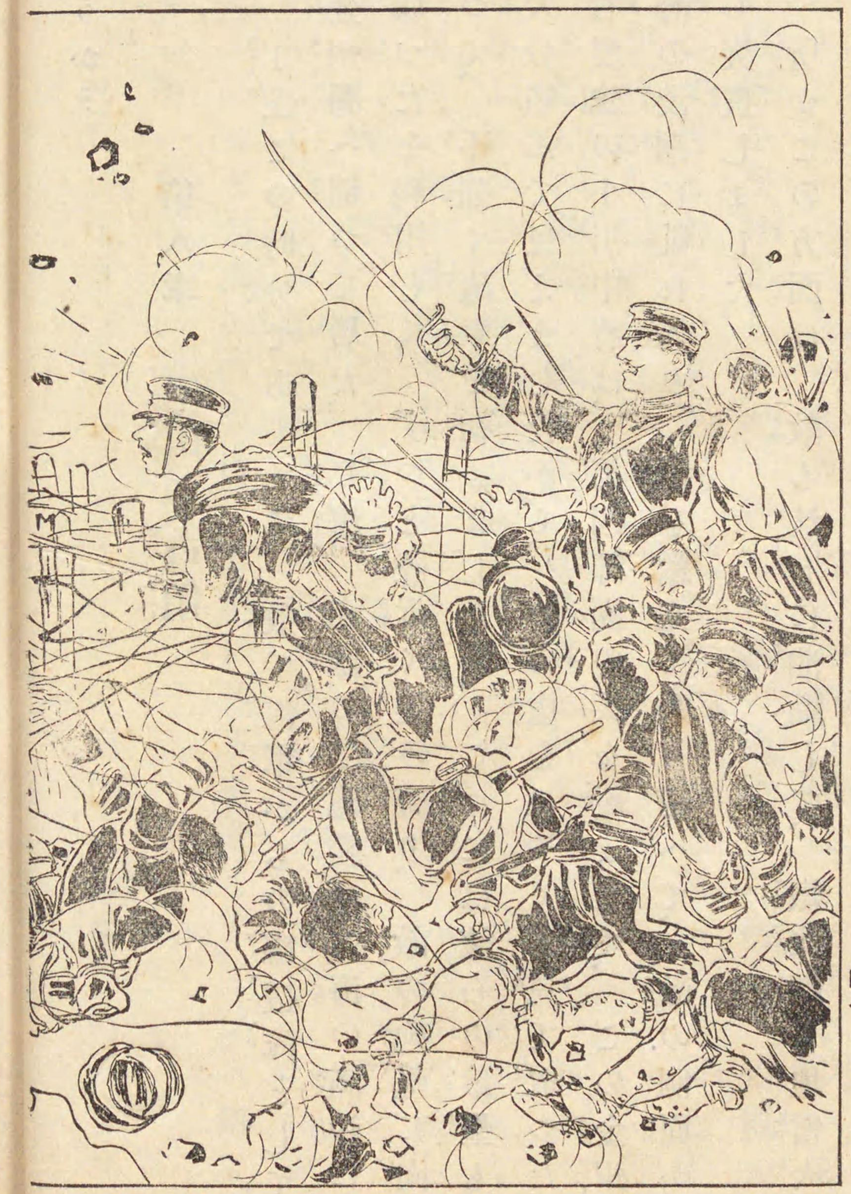
南山の占領
海軍の應援隊鳥海赤城の二艦
右翼隊金州灣を渡る

第八章　南山の占領

丁度この時分であります。兼て海軍からの應援隊として、金州灣へ廻つて居た、鳥海、赤城の二砲艦は、海の滿汐に成つたを利用して、ずつと陸近く進み寄り、敵の砲壘に向つて、手強く砲擊を初めましたが、これには流石の敵壘も、大分痛んで見えましたから、その虛をはやくも見て取つた、右翼隊の小川中將は、第四師團の兵を勵まして、この金州灣の淺瀨に亂れ入り、浪を蹴立て乘り越へて、敵の側面から突貫しました。

所がこの方面は、敵も流石に油斷して、鐵條網も地雷火

鐵條網の慘狀



南山の占領

第八章

第四師團の先登

五月廿六日午後七時

も、あまり設けてありませんでしたから、思ひの外譯も無く、敵壘の絶頂に攻め登り、此所の敵兵を追ひ出して、見事國旗を押し立て、一度に萬歳を唱へました。

すると、これを見た他の兵の、何で猶豫をして居りませう。中央に進んだ第一師團も、左翼に向つた第三師團も、大に元氣を奮ひ起し、彈丸を潜り、死骸を踏み越え、喚き叫んで突貫しましたが、その勢の凄ましさには、忽ち肝を奪はれて、大砲を投げ出し、砲壘を打ち棄てゝ、我先にと逃げ出しましたから、隙かさずこれを追ひ落として、遂に砲臺を殘らず乘取り、海も山も震ふばかりに、凱歌高く唱へましたのは、實に五月廿六日の、午後七時頃であつたのです。

十六時間の戰

死傷四千二百〇四

進藤、福田、野本、唐渡の四大尉、淺田少佐、堀内平大尉、田二の大尉、藤岡中佐、高田少佐、北村大尉、以下將校十三人、戰死三人、小原聯隊長

此朝砲火を開いてから、此時まで丁度十六時間。その間少しも休まず、命を的に働きました、我が將校士卒の勇氣の程は、今に初めぬ事ながら、實に感心の他はありません。その代りこの戰爭で、我軍の死傷者は、三箇師團を通して、四千二百〇四人。その戰爭の激しさも、これで十分想ひやられませう。

今その中で戰死の首な者を擧げれば、第一師團に、進藤、福田、野本、唐渡の四大尉、第三師團に、淺田少佐、堀内、平田の二大尉、第四師團に、藤岡中佐、高田少佐、北村大尉などで。將校は凡て三十三人。また負傷をした者の中には、第一師團の第三聯隊長、大佐小原正恒も居りました。

また海軍の方はと云ひますと、金州灣の奥深く、自分の

南山の占領

林鳥海艦長

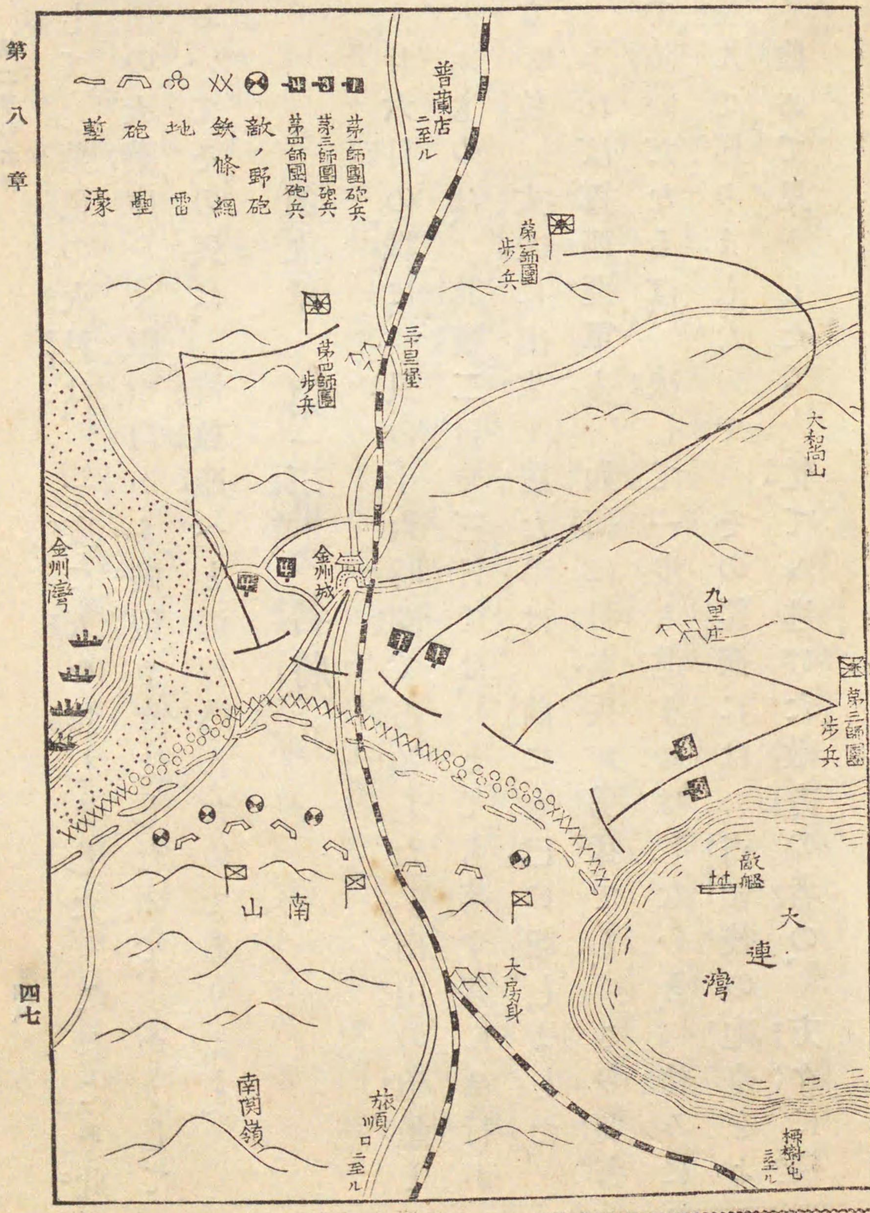
艦を乗り入れて、壯んに南山の砲臺を攻撃し、遂に陸軍の行動をして、首尾よく目的を達せしめた、鳥海艦長林三子雄の、艦橋で號令を掛けて居る最中、敵の彈丸をその頭部に受けて、敢無く戰死を遂げましたのは、まことに殘念な次第であります。

旅順街道の追撃

扨て我軍は、あの通りの苦戰の後、遂に南山を占領しますと、敵はもう一足も溜まらず、旅順街道へと逃げ出しましたから、此所を狙つて我が砲兵は、激しく追撃しましたので、何れも將棊倒しに擊たれまして、その損害の多かつた事は、此時が一番であつたと云ひます。

それと丁度同し頃に、先刻は頻りに彈丸を飛ばして、我が左翼を苦めた、大房身の砲臺に、不意に凄ましい物音が

南山攻撃の地圖



南山攻撃の地圖

火藥庫の破裂

第二軍の名將

して、紫色の火柱は、一度に天を焦しました。これこそ此所の火藥庫を、敵が自から破裂させましたので、かうしておいてその兵は、皆旅順へと逃げ込んだのであります。

第九章　第二軍の名將

廿六日の戰に、只の十六時間で占領した、南山の砲壘と云ふものは、其實二日や三日では、とても落す譯には行かない位、丈夫に出來て居た事は、前にも已に記しました。されば露西亞軍も、如何に日本兵が勇猛でも、この要害で防いだならば、決して一歩も進ませはしないと、恃みに恃んで居りましたので。その證據には、占領後の砲臺をよく檢めて見ましたら忙てゝ逃げた敵方の者の、方々に殘

砲壘に玩具を殘す

最初の大勝利

して行つた道具の中に、女の持物や、小供の玩具が交つて居たさうです。

して見るとこの砲臺には、戰爭の初まる少し前まで、將校や下士の家族のものが、一所に住んで居たに相違ありません。

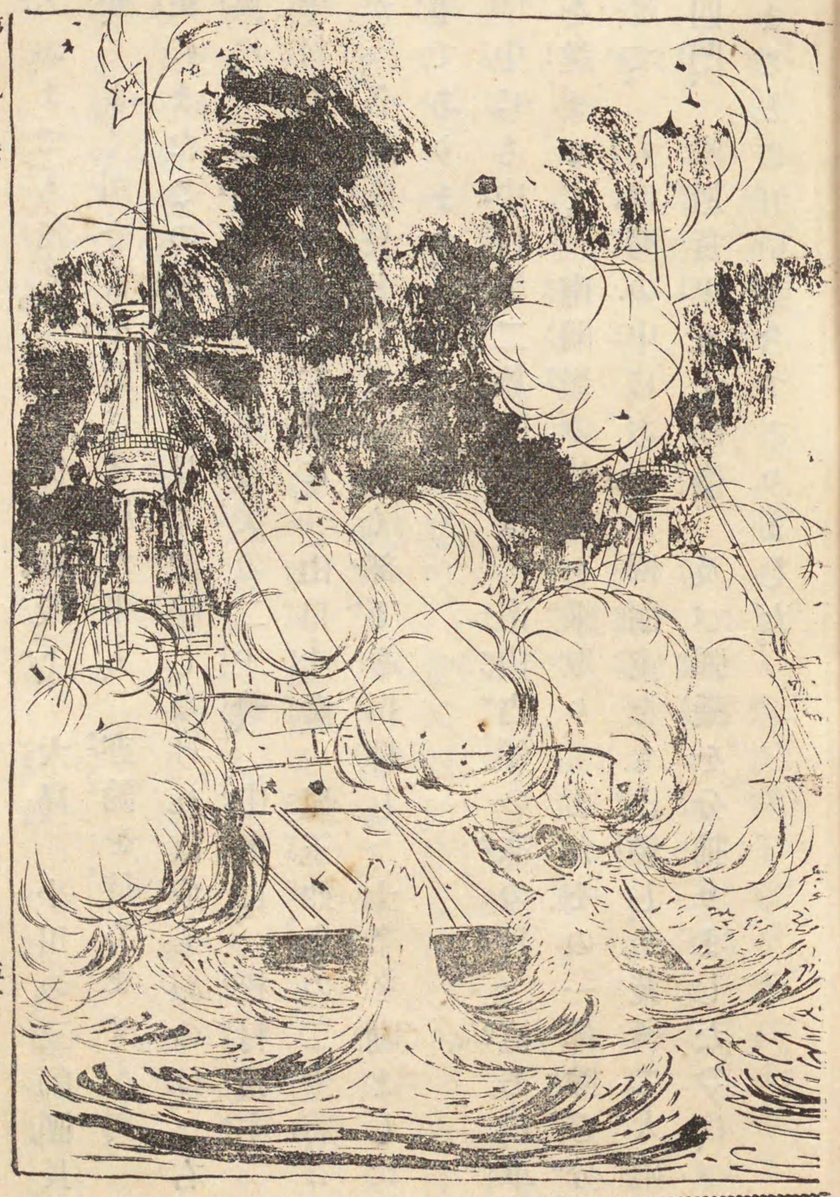
然るに我軍の勇猛さは、只の一日で攻落し、見事占領してしまつたのですから、敵の元氣はこの一戰で、屹度夥しく削がれましたらう。それに引かへて我が第二軍は、此の最初の大勝利で、その士氣の振つた事は、實に非常なものでありました。

さてもこの大勝利は、誰の手に依て得られましたか？奧司令官、落合參謀長の、作戰の宜きを得た事は、元より

金州灣に於ける海軍の應援隊

第二軍の名將

第九章



西島少將
安東少將
松村少將
中村少將
山口少將
兒玉少將

南關嶺柳樹屯の占領
大砲、貨車、彈藥の分捕

云ふまでも無く、また伏見宮殿下、大島、小川の三師團長が、よく司令官を助けて居た事も、亦論を待ちませんが、更にまたこの戰爭で、長く記憶しなければ成らぬのは、右翼に、西島助義、安東貞美の二少將、中軍に、松村務本、中村覺の二少將、左翼に、山口圭藏、兒玉如忠の二少將、が、各旅團長として、よく部下を指揮し、士卒を勵ました事であります。

中にも中村第二旅團長は、南山占領の次の日、直ちに軍を進ませて、南關嶺の敵壘を乘取り、またその一部隊を分けて、大連灣の中にある、柳樹屯をも占領し、此所で大砲四門、鐵道貨車五十餘臺、及び彈藥を分捕りましたのは、まことに好い都合でありました。

大連灣の要港

軍港と商港

柳樹屯を占領すると、間も無く青泥窪も我が手に入りました。青泥窪と云へば、この大連灣にある大切な港で、元は約らぬ所でありましたが、露西亞が此邊を借り入れてから、莫大の金をかけて、港を設け、鐵道を敷き、市街も立派に建てましたので、一寸見た所では、遼東半島とは思へない位、何事も新しく開けて、實に好い所なのであります。

實に露西亞は、この遼東の要所を占めてから、軍港には彼の旅順口と、商港には此の青泥窪を扣へて、云はゞ兩手に花を持つた樣に、得意に成つて居たのでありますが、その片手の青泥窪をば、此方へ取つてしまつたのですから、何と愉快ではありませんか。

が、この青泥窪を占領したに付いては、こゝに面白い話

があるのです。

第十章　青泥窪占領の奇功

青泥窪占領の奇功

大野上等兵

五月二十七日

さてこの青泥窪は、それほど大切な好い港でありながら、露西亞が別に兵力を以て、これを食ひ止めやうとはせず、無造作に日本の手に渡したのは、何う云ふ譯かと云ひますと、これは大野上等兵と云ふ、機轉の利いた兵士一人の、頓智の働き只一つで、見事取られてしまつたのであります。

時は五月廿七日、午前五時頃の事でした。第一師團の一隊は、營城子の近邊に居る、敵の樣子を偵察する爲めに、段々に進んで行つて、その十時半頃には、青泥窪の北の端にある、小高い岡の所へ來ました。

奥野騎兵大尉

橋本小隊長

思ひ掛ぬ日章旗

此所からは青泥窪の港は、一目に見おろされますから、まづその市街を見渡しますと、こは如何に！一面黑煙に包まれて、今しも火事の最中です。

戰爭かと思へば、大砲の音も聞えませんので、さては此所の住民が、とても敵はぬと諦めて、市街に火をつけて逃げたのだなと、尙此所で見て居ります中、斥候の向つた方面で、時々銃の音が聞え初めました。

さては矢張り敵が居るのかと、奥野騎兵大尉は、橋本少隊長に、部下を率ゐて市街を捜索させたのであります。

で、橋本小隊長は、急いで馬を走らせて、市街の中へ乘り込んで見ますと、この邊の家の表には、皆日の丸の旗が出て居りましたから、『これは何と云ふ不思議な事だ。我々

後から不意の射撃

斥候隊の他には、まだ日本軍の來た筈は無いのに、誰が來て占領してしまつたか知らん？イヤ〳〵！是は敵の計畧で、例の狡猾な露西亞人奴が、又旗を濫用して、味方を詐撃にするのではあるまいか。それでは決して油斷成らんぞ。』と、半は疑つて居る所へ、案の定後の方から不意に射撃の音がして、敵の騎兵が現はれた樣子です。

南無三敵の手に乘つたかと、思ひましたが少しも騒がず、『おのれ小癪な！』と云ひながら、その敵の中へ突貫します と、これわまた思ひの外脆く、忙てくさつて逃げてしまひました。

それにしてもこの旗は、全體何の爲めに誰が立てたかと、尙よくこれを調べて見ましたら、これこそ本隊の大野上等

傳騎敵地に入る

支那人に日本の國旗を立てさせる

兵が、此前只一人傳騎に成つて、この市街に入り込みましたとき、市中にまだ殘つて居た、支那人共に云ひつけて、『此所わもう日本軍が占領したのだから、早く國旗を揚げて祝はなければ成らんぞ。』と、かう云つて聞かした故でした。

それはまた何故かと云ひますと、此時大野上等兵は、只一人敵地に入り込んで、若し敵兵に見付かつては、多勢に無勢で迚も敵ひませんから、いろ〳〵苦心の末、遂に妙計を案じ出し、まづ支那人の家を訪づれ、手眞似や筆談で譯を話し、さてこそ國旗を立てさせたのであります。

さればこそ敵兵は、尙所々に居殘つて、現に橋本小隊長に、射撃を試みたのでありますが、この日本の國旗を見て、さてはいよ〳〵この市街も、日本の手に落ちてしまつた事

日本人十六名を救ふ

大連灣の掃海

と、大きに驚いて逃げたのであります。

その間にまた大野上等兵は、十分市街の様子を見屆け、その上開戰の當時から、露西亞人の爲めに捕はれて居た、日本人十六人斗りを、監獄から救ひ出して歸へりましたのは、實に大出來でありました。

第十一章　大連灣の掃海

さて靑泥窪は、思ひの外樂に手に入りましたが、いかに好い港でも、只取つたばかりでは、何の役にも立たないので、これを占領したからには、この港を利用して、此後は我軍を、此所から上陸させなければ成りません。然るにその大連灣は、敵も大切に守つて居た所ですから、

五月十二日より掃海着手、日宮古、進、嚴島

水雷を十分に沈めておいて、軍艦は云ふまでも無く、普通の運送船でも、うつかり是へ入らうとすれば、直ぐに爆沈する樣に成つて居ますから、決して安心は出來ないのです。

さうかと云つて我が軍が、此の水雷を恐がつて、此所へ船を入れない樣では、折角靑泥窪を占領しても、何の役にも立ちません。それなら如何したら可いでせう？

元より機敏なわが海軍、其所に決して脫目はありません。已にこの五月の十二日から、宮古、日進、嚴島の三艦に、水雷艇を澤山つけて、まづ大連灣の直ぐ隣の、大窖口と云ふ所から、掃海の事業に取りかゝりました。

掃海とは海を掃除する事で、即ち底に沈めてある水雷を、段々に探しては、それを打ち壞してしまふのであります。

水雷の危險

一種の決死隊

所が水雷と云ふ物は、元より水面には見えて居ず、何所にあるか少しも解らない物ですから、たとひ小さな船にもせよ、その上に進ませて、これを探ぐり出さうと云ふのは、跣足で栗を拾ひに行くよりも、實に危い仕事なので。うつかりこの水雷に觸れたが最期、船も人も微塵に成つてしまひます。

まだその上に陸の方には、敵の見張の兵が出て居まして、此方の仕事を妨げますから、これ等の者に對しても、時々戰鬪を開かなければ成りません。

さればこの掃海事業は、閉塞事業にも劣らぬ位な、命懸の仕事ですから、その大役を引うける士卒は、また一種の決死隊と云つて、少しも差支は無いのです。

四十八號水雷艇の破裂

蔭山艇長の戰死

宮古艦の爆沈

で、この決死の掃海隊は、この邊の海を廻つて、其所に沈めてある水雷を、頻りに引揚げやうとして居ります中、第四十八號水雷艇は、やがて機械水雷を見付け出し、これを壞さうとしましたが、何うしても壞れません。で、一トまづ其所を離れやうとしますと、意地惡くもその水雷が、その途端に破裂しまして、無慘や艇は眞二つに割れ、艇長蔭山少尉を初め、七名は戰死を遂げ、七名は負傷してしまひました。

目の前にこの危險を見ても、少しも痺まぬ海國の勇士は、續いて十四日の早朝から、また掃海を初めまして、水雷五個を發見し、皆首尾好くこれを壞して、午後四時卅五分頃、一トまづ引揚げやうとしますと、生憎我が宮古艦は、壞し

第四師團の突貫

大連灣の掃海

第十一章

嗚呼吉野初瀬
海軍の大不幸五月十五日

殘した水雷に、その艦尾を乘りかけたものですから、凄まじい音をして爆發し、僅か二十三分の間に、艦體は皆沈んでしまひました。が、幸ひ側に味方の船が、澤山あつたものですから、栃内艦長を初めとして、乘組大方は救ひ揚げられ、只下士以下に二名の死者と、二十二名の傷者を出した斗りです。

第十二章　嗚呼吉野、初瀬！

危險なる掃海事業の爲めに、第四十八號艇と、宮古艦とを失ひましたのは、實に殘念でありますが、まだそれより も無念に堪へぬ、我が海軍の一大不幸は、この事のあつた翌日、即ち五月十五日、吉野は春日と衝突し、初瀬は敷設

旅順口の監視
非常の霧
吉野、春日の衝突
佐伯艦長

水雷に罹つて、共に敢無く沈んでしまつた事です。

一體海軍の艦隊は、先に旅順口を閉塞してから、尙敵の之を破つて、外へ出る事の出來ない樣に、各艦隊が代る代る、此港外に陣を張り、嚴しく監視して居ました。

さればこの吉野艦も、第三戰隊の列に加はり、この監視の役をつとめて、十五日の午前一時四十分頃、他の艦隊と交代する爲めに、根據地さして歸つて來たのです。

所がその夜は、非常に霧が深くて、一寸先も見えない位でしたが、元より敵の前に居るのですから、用心の爲めの汽笛を鳴らされず、只注意に注意して、山東角の沖まで來ました時、丁度その後から來た、春日艦に衝突されて、忽ち沈んでしまひましたが、其爲めに艦長佐伯大佐を初め、

廣渡副長　竹内航海長　末松砲術長　弘瀬主計長　三百人の溺死　梨羽司令官　中尾艦長　有森副長　塚本參謀

廣渡副長も、竹内航海長も、末松砲術長も、弘瀬主計長も皆海中に葬られ、救はれた者は九十名斗り、殘る三百人餘りは、皆死んでしまつたのであります。

また初瀬の方は、此朝の十一時頃、旅順口沖に出て、敵を見張つて居る最中、敵の機械水雷に乘り掛け、その舵を破られましたから、其所を退かうとする時に、又もや二度目の水雷に、艦を當てたからたまりません。一萬五千噸の甲鐵艦も、忽ち底を破られて、あれよ〳〵と云ふ中に、海に沈んでしまつたのであります。

此時この初瀬には、梨羽少將が司令官として、丁度乘り合はせて居りましたが、此人は中尾艦長と共に、幸に助かりましたけれども、副艦長有森中佐、參謀塚本少佐、軍醫

關軍醫長　仁禮分隊長　閉塞隊勇士の不幸　二等巡洋艦　十年前の戰功艦　一万五千噸の一等戰鬪艦

長關中監、分隊長仁禮少佐を初め、將校下士卒で五百人斗りは、無慘な最期を遂げました。

中にも氣の毒に堪へないのは、彼の閉塞の大役に當つて、疾くも勇名を轟かしました、山賀代三、大石親德、竹内三千三など云ふ人々が、矢張り此等の艦に居た爲めに、共に戰死してしまつた事です。

嗚呼吉野、初瀬！　吉野は僅に四千噸餘の、二等巡洋艦に過ぎませんが、十年前の黄海の戰には、少からぬ功勞を顯はし、其名は今も人の耳に、正しく殘つて居る名譽の艦です。

初瀬はまた今から漸く五年前に、英國で初めて進水をした、排水一萬五千噸、速力十八哩、通常砲四門、速射砲四十六門、水雷發射管四個と云ふ、帝國第一流の戰鬪艦、

花は櫻木
人は武士

少年日露戰史第四編 完

今度が初陣の海戰でありましたのに、むざ〳〵水雷の爲めに破られたのは、嗚呼何と云ふ不幸でありませう。

が、不思議な事にはこの二艦とも、日本で名高い櫻の名所を、その艦の名に着けて居ります。抑も櫻は日本の名花、花は櫻木人は武士とは、共に世界に類の無い、日本特有の名物であります。

それは櫻の散り際の、武士の最期とよく似て居て、共に美し勇ましい事が、他に見られない故ではありませんか？今やこの吉野、初瀬は、その名物の日本武士、幾百の勇將猛士を載せて、名に負かぬ花やかな最期を、この黃海に遂げました。嗚呼吉野、初瀬！

南山攻撃
南山攻めんと更くる夜に

少年必讀 軍國讀本

巻の四

巖谷小波編

一 南山攻撃（軍歌）

第一章

南山攻めんと更くる夜に、
山また山をよぢ登り、
たどれる道は道ならず、
覺られまじとひたすらに、
進みちかづく第二軍。

第二章

勇み進める武士の、
谷また谷を打ち越へて、
此所に彼所に踏み迷ひ、
皆息の根をころしつゝ、

折しもあれや夕立の、黑雲空にふさがりて、
ひらめき渡る稻妻や、はためき落る霹靂の、
音すさまじく降る雨は、車軸を流す如くなり。
天の祐と喜びて、敵の堡壘めざしつゝ、
進みよりたる第二軍。

第三章

警戒嚴しき敵兵は、闇夜を照らす光彈や、
目あても分かぬ砲彈を、うち放ちつゝ守れども、
我が皇軍は事も無く、山の此方に砲を据ゑ、
岡の彼方に兵を伏せ、戰列こゝに調ひて、
明くるを待ちし第二軍。

第四章

我が砲兵は二百門、時をたがへず諸共に、
それと火蓋を切りければ、敵またこれに應戰し、
火花をちらすその樣は、電光石火も只ならず。
この時歩兵の一隊は、金州城を打ち破り、
難無くこれを落しけり。

第五章

第四師團の強者は、金州灣の海手より、
第一師團の武士は、南山堡壘の正面に、
第三師團の丈夫は、大房身の側背に、
息をも次がず攻めよせし、獅子奮迅のありさまは、
譬へんものも無かりけり。

第六章

金州灣の波間より、わが軍艦は進み出で、
敵壘めがけて打出せば、大連灣のあなたにも、
敵の軍艦あらはれて、また我軍を砲撃す。
海陸一致の大激戰、山嶽爲に震動し、
天地も崩るゝ斗りなり。

第七章

此の勢に避易し、敵砲間も無く沈默す。
さは云へ敵壘堅固にて、西に東に鐵條網、
右に左に機關砲、地雷火狼穽とり〴〵に、
防禦の手だて拔目無く、必死と成つて戰へる、
敵の勇氣ぞたけ〴〵し。

第八章

慓悍決死の我兵は、硝煙彈雨を冒しつゝ、
屍の山を踏み越へて、縱橫無盡に突擊す。
流石の敵も氣を呑まれ、皆ちり〴〵に逃げ落ちて、
我日の本の日章旗、南山高地の頂上に、
夕日と共に輝けり。

第九章

戰すみし夜の空、雲間の月は影淸く、
吹き來る風は腥し。この戰に斃れたる、
我强者は幾何ぞ？大和島根に名も高き、
花は櫻に人は武士、散るべき時に散りてこそ、
その名や代々に薰るらん。

右中村少將（覺）陣中の作

伏見宮殿下の御武德

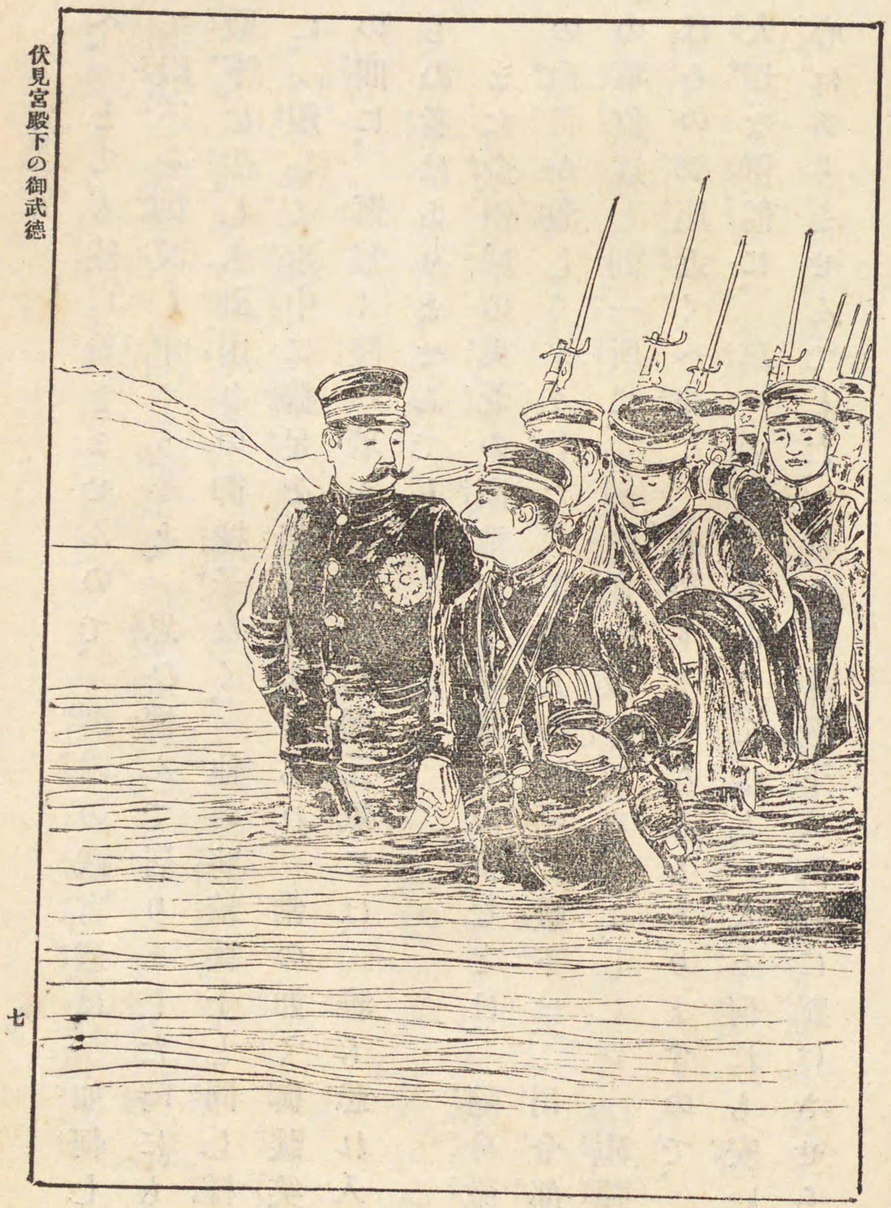
二　伏見宮殿下の御武德

金枝玉葉と云つて、御身は　天皇陛下の御親戚、皇族方の御中でも、殊に御年長に渡らせられる、我が伏見宮貞愛親王殿下が、世にも貴い御體を以て、親しく戰場に臨ませられた事は、我々日本臣民、實に恐懼の至り、感謝の極と云はねば成りません。

然るに宮殿下は、第一師團長の御大任を帶ばせられ、第二軍の中軍として、金州南山の戰に向はせられるのに、少しも他の軍人と變らせ給ふ事無く、幾萬の士卒と共に、同じ辛酸を嘗めさせられたのであります。

例へば鹽太澳の御上陸の時など、風荒く浪高く、端艇さ

伏見宮殿下の御元氣



伏見宮殿下の御武德

御談笑の間に御徒歩渡り

砲彈御坐近く來る

へ、とても陸に着きませんので、御附の武官達は、如何して殿下を御渡し申さうかと、思ひ惱んで居りました時にも、殿下は少しも御困りの御樣子なく、他の將校兵士と同し樣に、親しく水中に御足を踏み込ませられ、常の如く御談笑の間に、難無く陸へ着かせられた御元氣には、誰も恐れ入らぬ者はありませんでした。

また金州城の東北の高地で、御奮戰の折などは、隨分敵の砲彈が激しく來ました。丁度其時師團長殿下は、司令部の幕僚達と御一所に、御中食の最中でありましたが、砲彈はその御座近くへ來て、破裂する事などもありますので、大切な御體に、萬一の事でもあつてはと、人々何れも安い心はありませんでしたけれども殿下は御心に懸けさせら

敵彈を下物にビールを召し上る

高畑上等兵

れず、有り合せたビールをば、幕僚達にも御分けに成り、

『どうぢや、よい下物があるでは無いか。其方達も一杯やれ！』

と、仰せられました御勇氣には、何れも舌を捲いて感じ奉つたと云ひます。

一軍の大將として、かくまで武勇に富ませられた殿下は、また部下の將卒に對しても、一方ならぬ慈愛を垂れ給ひました。

今その一例を此所に記しませう。

第一師團の或る隊に、高畑と云ふ上等兵が居りました。南山の戰爭に、自ら決死の先鋒隊に加つて、砲壘に突貫し、目覺ましい働きをしましたが、其時身體中に六個所の傷を

野戰病院

受け、中にもその一發は、右の眼球を擊たれましたので、遂に野戰病院に入れられ、重傷者の一人として、手厚い看護を受けて居りました。

所へ師團長殿下は、御自身御見舞に入らせられましたが、この男を御覽に成ると、兩眼共厚く繃帶されて、身體の動きも取れぬのを不憫に思召し、

『高畑！　名譽の負傷ぢやぞ。氣を確かに持てい！』

と云ふ御言葉です。

唐突にかう云はれた高畑上等兵は、元より眼が見えませんから、殿下とは心付かず、只横柄な言葉遣をする人だと思つて居ますと、

『其方は眼が見えんで不自由であらう。欲しい物があるなら遠慮無く云へ！』

と仰有つて、やがて御手づから、望みのまゝに水を飲ませたまひ、また御持合せの卷煙艸に、御自身で火を付けて、この兵卒に賜はりましたが、高畑はあまりの御親切に感じまして、

『失禮ながら何方樣で御座りますか？』

と尋ねまして、初めて、

『乃公は師團長ぢや。』

と云ふ御聲を聞いた時は、高畑は夢かと斗り、その眼の痛さも忘れて、難有涙に暮れたと云ふ事です。

高畑ならぬ人々も、この美しい御話を聞いて、誰が泣かずに居られませうか？

御手づから、水、煙艸を賜はる

難有涙

鳥海艦長
軍人の覺悟
林中佐

三　鳥海艦長

凡そ軍人として、戰場に討死する事は、元よりその本懷でありますから、誰もその覺悟に於いて、別に差異は無い筈であります。

が、彼の南山の戰に、敵砲壘の横合から、應援の射撃を行ひ、大いに陸軍の突貫を助け、遂に其身も犧牲と成つて、金州灣の浪の花と散つた、鳥海艦長林中佐の死に至つては、その覺悟に聊か異つた所のあるのは、人の注意せねば成らぬ所であります。

中佐は第三回閉塞の時、その總指揮官と成つて、名譽ある大事業に從がはうとして、中途で風波の爲めに遮られ、

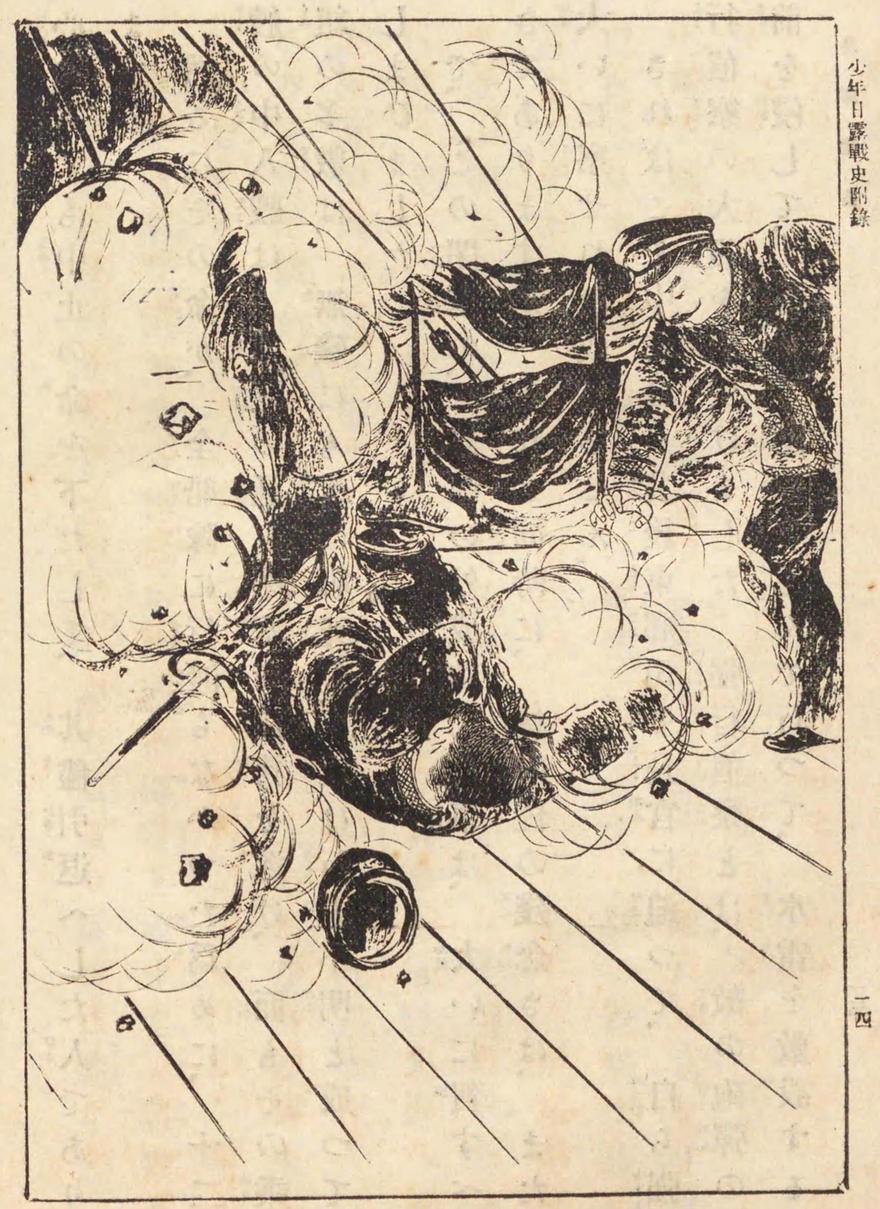
心ならずも中止の命を下だして、其儘引返へした人であります。

然るにその命が、全船隊に行渡らなかつた爲めに、十二艘の中八艘は、豫定の通り閉塞の任務を遂げ、而もその乘組の多數は、無殘にも或は戰死し、或は行方不明と成つてしまひました。

で、この閉塞の、思ひの外成功した事は、大いに賀すべきでありますが、それと同時に、林中佐の殘念さは、また大いに察せねば成りません。

さればこそ中佐は、其後東鄉司令長官に迫つて、自ら强行偵察の大役を引受けました。强行偵察とは、敵の砲彈の前を侵して、强いて港口に進んで行つて、水雷を敷設する

林中佐の戰死



頭部に敵彈

と云ふ、閉塞にも負ない位な、危い仕事なのであります。

其後また中佐は、金州灣の應援隊として、小さな鳥海艦に乘組み、その吃水の淺いのを利用して、砲臺間近く乘り入れて、手強く敵を攻め立てました。その仕事の危險さも、命を惜む弱虫には、決して出來ない事なのであります。

然るにこの林中佐が、好んでこの危險を侵し、決死の働きを仕たと云ふものは、抑も何の爲めでありませう？實に中佐は、其時自ら艦橋の上に立ち、左手に望遠鏡を持ち、右手に劍を取つて、頻りに號令をかけて居る中、忽ち敵の砲彈を、その頭に擊ち込まれて、其儘戰死しましたが、寧ろ中佐自身に取ては、是は其本懷でありましたらう。

中佐は河內國北條の士族で、藤原魚名の末孫だと云ひま

幼時は内氣の質

果斷に富む

航海術に長ず

す。子供の時分は至つて内氣で、友達と遊ぶ事を好かず、却つて獨り砂山を拵へ、溝を掘り、水を流しなどして、これを何よりの娯樂として居た位ですが、また手頭が器用で、自分で車の器械を發明した事もあるさうです。

兵學校に居た時分は、性質も快活に成り、また果斷に富んで居ましたが、功名心は決して無かつたさうです。ですから第二回の閉塞隊の時も、その總指揮官には、なまじ功名心に驅られて、突飛な事をする人よりも、かう云ふ落着いて物を考へ、事に臨んで果斷に富んで居る人を、これに任じた方がよいであらうと、東郷司令長官も、中佐の志願を喜んで、早速これに命じた位でありました。

また中佐は、常から航海術に長じ、その苦心をして作つ

伯林公使館附

勇猛士官

太沽砲臺の一番乘

白石霞江

た海圖は、日清戰役の時、大いに役に立つたと云ふ事で、當時金鵄勳章を賜はり、後には獨乙國に留學を命ぜられて、伯林公使館附にも成つた位ですが、それを今死なしてしまつたのは、實に殘念な次第であります。

四　勇猛士官

明治三十三年、北清戰役の當時に、太沽攻撃の戰に參加り、自ら陸戰隊の眞先に立つて、太沽砲臺の一番乘を爲し、その名を世界中に轟かし、遂に歐米の諸軍から、『勇猛士官』の名を取つた、愉快な海軍士官のあつた事は、誰もまだ記臆して居りませう。

あゝ勇猛士官！　其名は白石霞江と云つて、其後暫時聞え

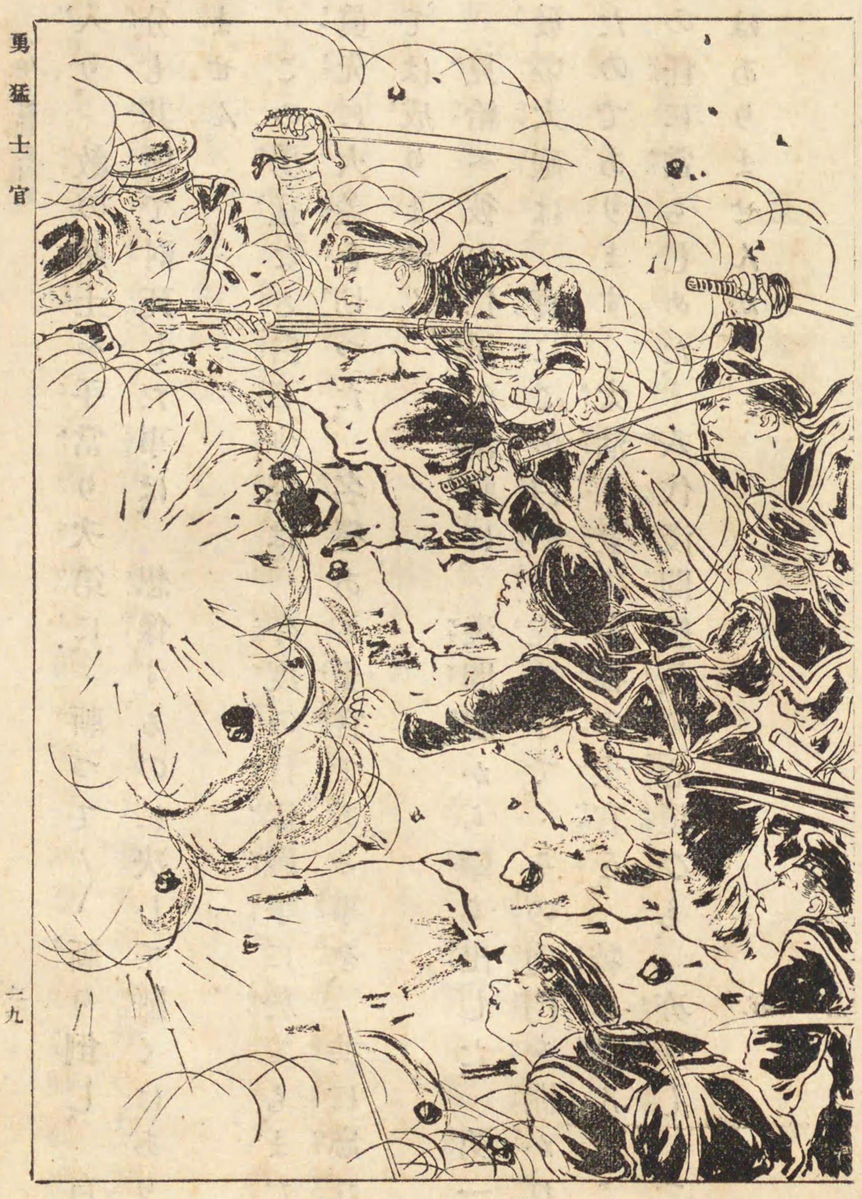
生死不明

ませんでしたが、今度第三回の閉塞が行はれ、彼の旅順の港口に、空前の壯烈な活劇を演じた、我が海國の快男兒の中に、又もやこの名が見えたのであります。

此時白石少佐は、佐倉丸の指揮官と成つて、港口近く進み入り、此所に爆沈したのでありますが、少佐を初めその乘組の者は、殆んど殘らず生死不明、行方が更に解らぬのであります。

嗚呼生死不明！實にこの四字の中には、如何なる悲慘な事實と、壯烈な行動とが、含まれて居るか解らぬので、その平生の人と爲りから見ても、此時少佐はおめ〳〵と、船と共に水底には沈まず、却つて敵地に乘り込んで、兼て用意の日本刀を振り翳し、砲臺若くは陣營へ、勢よく斬つて

白石少佐の勇猛



勇猛士官

日露開戰第一發の砲門を開く

入り、敵の將士を手當り次第に、斬つて〳〵斬り倒し、自分も其所で討死した事は、想像するのに決して難くはありません。

この勇猛なる白石少佐は、今度の日露戰爭に於ても、また眞先に火蓋を切つた、名譽ある士官である事を、共に忘れては成りません。

見給へ彼の仁川の海戰に、淺間艦から擊ち出した、第一發の大砲は、實にこの白石少佐の手で、その砲門を開かれたのであります。太沽先登の名譽の士官を、特に選んでこの任に當らしめた、八代淺間艦長の心遣ひも、亦床しいではありませんか！

宮本武藏の末孫

陸軍中尉宮本秀一

劍術の達人

五　宮本武藏の末孫

劍術は日本の名物、その名物の劍術使の中に、一番豪いと稱せられたのは、宮本武藏でありました。

が、この宮本武藏の子孫に、宮本秀一と云ふ人があつて、明治の御代に陸軍中尉と成り、南山に名譽の戰死を遂げた事も、また永く記憶すべき事であります。

宮本中尉は、流石に先祖の名を辱めず、自分も劍術の達人で、曾て成城學校に居た時分、竹刀を持つては此の人に、誰も及ぶ者は無い位でしたが、常から品行の正しい人でしたが、まだ妻を迎へず、只馬ばかりに金を出して、他の事は頗る質素に暮らし、時には

軍服を着た儘で、自分で米を炊いて居た位ですから、第二軍の司令官、奥大將も中尉を可愛がり、『宮本は實に軍人の模範である』と、人にも話して居たと云ひます。

軍人の模範

されば軍人の模範として、南山に名譽の戰死を遂げたのは、元より本人の望む所でありましたらうが、かゝる有望の若い將校を、また中尉か大尉の間に、死なせてしまふと云ふ事も、考へて見れば實に惜しいではありませんか。

六　苦戰の聯隊

苦戰の聯隊

南山攻撃の日、その中央軍として進んだ、第一師團の諸隊の中で、最も苦戰をしたと思はれるのは、小原大佐（正恒）の率ゐて居た、第三聯隊でありませう。

小原大佐（正恒）

聯隊はその突貫の時、味方の士氣を鼓舞する爲め、眞先に軍旗を押し立てましたが、頻りに狙撃をしましたから、敵はまたこの軍旗を目がけて、に中たり、餘議無く佐藤少尉が代つて行きますと、佐藤もやがて敵に撃たれましたので、急いで旗を野村少尉に渡しましたが、この少尉もまた負傷してしまひました。此位でありますから、その聯隊旗は敵彈の爲めに、竿を挫かれ布を破られ、旗の形も殘らない位な、凄ましい有樣に成つてしまひました。

江澤少尉
佐藤少尉
野村少尉

その中に小原聯隊長は、その額に傷を受け、一時其場に倒れましたが、猶屈せず進まうとしますと、部下の者はこれを留めて、後へ退かせやうとしましたが、

前額に負傷

小原聯隊の苦戰

進藤大尉岡村中尉
藤島の故事
友愛の嬉涙
匝瑳大尉

『ナニこれしきの傷に繃帶は入らん！』

と、聯隊長は何うしても聞きません。それを部下の者共は、殆んど引ずる樣にして、無理に後の方へ退かせ、其所で繃帶をしましたが、此時副官進藤大尉、岡村中尉の二人は、聯隊長の身を庇ひ、敵彈の前に立ちましたので、それに中つて遂に斃れました。

彼の藤島の戰に、新田義貞の討死した時、忠義の郎黨矢面に立つて、主の馬前に斃れたと云ふ、昔の美談に比べても、決して劣る所の無い、好い話ではありませんか。

七　友愛の嬉涙

第三回閉塞隊の時、三河丸の指揮官と成つた、匝瑳海軍

第四十一號艇水野大尉
四番船
三河丸

大尉と、この乘組を收容した、第四十一號の艇長、水野海軍大尉とは、常から非常な親友でありました。

然るにその一人は、死を決して閉塞に向ひ、また一人は、その生きて還る所を、收容しやうと云ふのですから、互ひの心の中と云ふものは、實に思ひ遣られるのであります。で、水野大尉は、自から水雷艇を操つて、旅順の港外まで向ひますと、遙か彼方の波の間に、軍歌の聲が勇ましく聞えて、閉塞隊の者が歸つて來る樣ですから、大聲に『ボート！』と呼び止め、それから『何番船？』と聞きましたら、『四番船！』と云ふ答です。

四番船とは三河丸の事。それには匝瑳大尉が乘つて居るのですから、水野大尉は胸を躍らせ、直ぐにも

『匝瑳無事か？』

と聞うとして、已に咽喉まで出かけましたが、いや〳〵！若しその人が其所に居らず、『戰死！』と云ふ答でも得たらと、思ふとまた問ふにも問はれず、只眼ばかりを見張つて、ちつとボートを見つめましたが、その時はまだ夜が明け切らないので、誰が誰やら解りません。

その中にボートの乘組を、皆艇へ乘り移らせますと、やがて自分の後から、『艇長』と呼ぶ者がありますから、急いで振り向いて見ましたら、嬉しや我が親友の、匝瑳大尉は其所に居りました。

『オヽ匝瑳！』

嬉し涙に言葉なし

『水野！』

と、二人は思はず抱き合ひましたが、

『よく無事で歸つて來てくれた！』

『安心してくれ！　首尾好く奥まで入つて來たぞ。』

と云つた時には二人共、もう嬉し涙に胸が迫まつて、後は口も利けませんでした。

八　決死の志願

鐵條網と云ひ、地雷火と云ひ、共に屈竟の防禦物で、これ丈でも突貫の仕悪いものであるのに、敵はまた機關砲を以て、寄手を惱ましましたから、これに向ふ我軍の困難は、實に筆には盡されない位でした。

決死の志願

松村旅團長　牛島聯隊長　第三中隊　第十二中隊　地雷火を踏みに行く　白井軍曹

其所で松村旅團長は、牛島聯隊長と相談しまして、此上は仕方が無いから、工兵隊に應援して、彼の鐵條網を切り拂ひ、地雷火を踏み破る爲めに決死の一隊を出す事に成り、まづ新手の第三中隊と、第十二中隊を列べ、大隊長その前へ出て、

『是から決死隊を組んで、地雷火を踏み潰しに行かうと云ふ者は、各自の劍を揚げい！』

と云ひましたら、隊の兵士は皆劍を揚げて、その決死隊を志願しました。

この勇ましさと健氣さには、旅團長も聯隊長も、涙を浮べるまで感激しましたが、元より瀨踏の事であるから、一人同が行くには及ばぬと云ふので、その中から白井軍曹以下

以下十六名

十六名を選拔し、これを先鋒に向はしました所が、元より火の中に入る樣なもの、一人として無事に助かつた者はありませんでした。

尤も彼の地雷火丈は、前の夜の大雨の爲めに、大方洗ひ出されて居ましたから、その破裂する前に、皆打ち壞す事が出來て、大いに都合が好かつたのであります。

然しかう云ふ決死の塲合に、誰一人尻込をする者は無く、進んでこれに當たらうと云ふのが、我が日本兵の特色で、この特色あればこそ、さしも堅固な南山も、只の一日で落ちたのであります。

決死の志願

少年必讀 **軍國讀本卷の四** 完

明治三十七年九月十二日印刷
明治三十七年九月十[illegible]日發行

南山の卷
定價金拾貳錢

著者　巖谷季雄
東京市日本橋區本町三丁目八番地

發行者　大橋新太郎
東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷者　水谷景長
東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷所　合資會社博進社工場

不許複製

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

江見水蔭君新著

軍事小說

武裝の巻

全一冊　洋裝美本　口繪着色畫▲水兵の夢……山中古洞君筆

大判紙數二四四頁

正價金貳拾五錢　郵稅八錢

◎軍事小說

進軍の巻　江見水蔭君著　近刊

軍事小說家として本邦唯一人なる**江見水蔭氏**が獨特の快筆を揮つて以て**戰爭の表**を書き著はし得意の短篇を揮つて以て**劍と筆**とを一致せしめ軍國の出來事を詩想化し文學の力を以て**露國退治**を企てたる近時稀に見るの**一大雄篇**卷中目次の重なるものを擧ぐれば左の如し

●水雷艇の行方(完)　●金の指環(完)　●水兵の夢(完)
●艦作(完)　●血の稅(完)　●近眼兵士(完)
●航路の杜絕(完)　●帝國艦隊(完)　●常陸山(完)　●軍事記者(完)
●旅順の荒浪(完)　●兒童軍(完)　●見送り(完)　●風流斥候(完)
●馬賊(完)　●衛兵(完)　●青物橫町(完)
●聯隊長の一喝(完)　●草鞋壹萬足(完)　●浦鹽攻擊(完)
●號外と電報(完)　●士官室(完)　●劍と簪(完)
●力士の入營(完)　●貧乏少尉(完)　●其他三十餘篇

發兌元　東京本町　博文館

巖谷小波君編

少年日露戰史

附軍國讀本

全部拾貳冊　毎月一回十五日發行

今の少年の爲め、今より後の少年の爲めに空前の壯擧日露戰爭を永く記臆せしめん爲めに著者が、獨特の快筆を揮へるは即ち此書とす、日露の干係、開戰の原因を、毫も遺憾なく、耀々として目に晴るが如し、若し夫れ附錄軍國讀本に至りては、開戰當時に於ける、名將名士が逸話奇談を一種の讀本體に記述せるもの、何者かまた之に如かんや、眞に本書の如きは、中間數十の日露戰記中、正に千古に傳ふべき唯一のものたり荷も日本帝國の少年たるもの、一本を坐右に備へずんば日本少年たるの資格なきものなり。

第壹編　開戰の巻

▲戰爭の原因　▲仁川の勝利
▲三國の干涉　▲旅順の攻擊
▲露國の無法　▲宣戰の詔勅
▲露西亞は何な國　▲國民皆兵
▲文明と野蠻の戰　▲擧國一致
▲艦隊の出發　▲新艦の到着

附錄軍國讀本　●葉山の御夢●東洋の子ルソン●三殿下の御勇●敵前の尺八●殘る劍●軍歌旅順の海戰●下瀨火藥の事●初瀨の初花

第貳編　決死隊の巻

▲日韓の條約　▲第二回の閉塞
▲閉塞の計畫　▲閉塞の成効
▲決死隊の出發　▲マカロフの戰死
▲決死隊の行動　▲行軍の困難
▲驅逐艦隊の激戰　▲騎兵の奮戰
▲間接射擊　▲露艦の亂暴

附錄軍國讀本　決死隊の歌●勇士の滕枕●機關兵の沈勇●軍神の歌●氷割の勇士●大切な軍艦旗●子供好の中尉●斥候の秘性

編刊▲第參編　九連城の巻

以下戰局の進むに隨ひ逐次題を撰み例の雄文に訴へて少年諸君の閱讀に供せんとす皆是れ正確事實の通知にして而も心神修養の資ならざるなし

▲各洋裝背クロース並製大判百餘頁　正價金拾貳錢

●六冊前金六拾七錢　郵稅一冊
●十二冊金壹圓廿八錢　四錢宛

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

研堂
石井民司君著

少年工藝文庫

全部二十四冊
每編有名畫家
密畫數十挿入

第一編 鐵道の巻

少年日野力太郎が汽車鐵道に對する大氣燄、各種の鐵道に關し學理は勿論、奇談珍話迄擧げ盡し、一讀鐵道通となり得べし。

第二編 水道の巻

都市膨脹の母たる水道の水は、衛生上防火上最緊要の關係を有す。少年水野氏之を縱橫に說明し、玲瓏の淨水の迸るに似たり

第三編 瓦斯の巻

少年炭野氏の受持、ガスの如何にして製出せられ精製せられ戶々に供給せらるゝやは、本書によりて始めて明晃々たらんか。

第四編 寫眞の巻

少年陽氏、獨力刻苦して寫眞機を製作し現像燒付の成功せし面白き經歷より、巳寫眞機を得て寫眞の薀奧を窮めし寫眞全書也

第五編 電話の巻

少年雨田氏電話電信の事に通ず坐して千里の客と談じ東西比隣の如き原理を說明し無線電信の新發明まで附載してのこす處なし。

第六編 硝子の巻

河岸海濱の砂を熔して螢澤明徹の硝子となすより少年簡易の硝子製造法迄愉快の硝子談にて少年釜戶氏獨得の妙術を公にせり。

第七編 紡績の巻

オークライトの紡績機械を發明してより天下の工業は其面目を一變せりといふ少年絲野氏其奇機を擧げ績紡までの順序を詳說せり。

第八編 活版の巻

活字の鑄造、植字、印刷の奇機、職工の熟練等、少年植田氏の言によりて活版に關する一切を說て人類幸福の由來を明にせるものなり。

第九編 滊船の巻

海上交通の唯一の要物船に對し、少年海野その造船航海の法等を大呼して同窓を驚かせしもの即ち本書なり。

第十編 製紙の巻

西洋紙の原料漉方等一切を實驗を促すまで親切に說明せるは、少年神祖氏なり、一讀して雪白の紙の立ろに成るを知るべし。

第十一編 銅山の巻

銅は本邦特有の產物にてその採掘と精鍊とは科學の應用至れり盡せり、少年和同氏の談論人をして神往にたへざらしむ。

第十二編 電燈の巻

滿都不夜城の壯觀を紲ふ電燈は如何にして光明を放つや、この答は、本書をよみて少年入來氏と遊べば忽ち氷釋すべし。

第十三編 陶器の巻

少年陶山氏は窯業熱心の人にて陶土、火力窯、燒成、釉藥等一切の答辨詳審、如何なる素人も陶器の何物たるを知り得べし。

第十四編 漆器の巻

漆塗法を學理的に說明しその實驗をすゝむるは少年七木氏なり本書を讀みて後、凋美滑澤の漆器を見ればその趣味一層深かるべし。

第十五編 時計の巻

大小各種の時計を製造する所の工業は頗る趣味多く又人類に大幸福を與ふるものたり。少年來間氏之を說きてまた遺す所なし、

第十六編 燐寸の巻

一本のマツチ心なく費す人は多けれども之を製造する法を知らざる人多し。少年新火氏は大マツチ通にて所說觀るが如し。

第十七編 織物の巻

織田組子女子木綿平織より絹の紋織に至る迄說くと平易流暢順序あり、殊にジヤカード機の說明の如きかゆき所に手屆けり。

第十八編 染色の巻

日本固有の法は勿論西洋人造染料染法まで理論と實際と染色法の一般を明にせるは少年染田氏の說につきて見るを要す。

第十九編 煙草の巻

煙草殊に紙卷煙草の工業的奇觀を仔細に知らんとするものは、少年八雲氏の本書についで學ぶべし思ひ半ばに過ぎん。

第二十編 砂糖の巻

內外砂糖の原料、製造法、製造機械、砂糖と人類の關係等を一讀瞭然たらしむるは本書の主旨少年五味氏の研究にかゝる。

第廿一編 醸造の巻

和洋酒類發酵の原理より工業的醸造の方法まで反覆說明之を掌上に指すが如し、少年三輪氏特得の解說法にて精密至れり盡せり。

第廿二編 石油の巻

人家每日必要の石油に就て採掘より精製までの實況を詳明し殊に北越油田堀方を紹介せるもの本書なり。少年石田氏の擔任とす。

第廿三編 機械の巻

工業上必要の諸機械類につき少年幾田氏能く其運轉の妙用を自得し解剖說明人をして車軫煤烟の間に在る想あらしむ。

第廿四編 建築の巻

和洋建築一切に關するその術と珍談奇說を併せ錄し、建築の何者たるやを知らしめたるものなり。少年手置氏万丈の大氣焰。

▲各大判洋裝並綴紙數約百廿頁 **正價一冊拾五錢**

六冊八拾五錢●十二冊壹圓●廿四冊參圓貳拾錢

郵稅一冊四錢

宛▼

博文館新刊劒舞獨習書

適心齋井口義爲君著

露國征伐 劒舞獨習圖解

劍舞は我國の特技也其人心を鼓舞するに於て其勇氣を振起するに於て最も我國情人心に適し社會に稗益する所多きを知る、故に劒舞は我國遊藝中青年の必す練習すべき技術なるものと言ふべし、著者は武術柔道に精通し、劒舞亦蘊奥を極む此頃時局に感する所ありて劒舞の新書を著はし、之を世に公にす其說明頗る綿篤にして、劒舞の手を附するに、畫工を其席に侍せしめ親しく其姿勢を實寫せしむ、故に圖解と活動圖とを對照せは讀者は立所に領解し自在に斯術を演することを得べし況や征露の今日、國民必習必讀の書なること言を待たざるなり

洋裝並綴　正價金貳拾五錢　郵稅四錢
中判二百四十八頁

野津陸軍大將　伊東海軍大將　土方伯爵　小笠原子爵題辭

劒舞術教範

神刀流劒舞術開祖
日比野正吉君著

劒舞の行はるゝや久し、而かも世の所謂劒舞は嬉戲態を成し、絕へて精神骨力の見るべきなし、其拔たる倡優妓女と相距る果して幾何ぞ、我神刀流劒舞術開祖日比野正吉氏の劒舞術に至りては、別に一機軸を出して斯道に生を開く、其術たる劒法柔道及び居合法の極意を取り、打して一丸となせるもの、其壯快活潑なる、懦夫をして奮はしめ、其悲壯淋漓なる猛士をして泣かしむ。所謂不動心の極意の如きは直に人の心法に關す。有も此極意を會得せは膽氣海を呑むべし。方今青年體育の問題漸く世間に高し、而かも劒術柔術皆多少の難あるを見る、獨り劒舞術に至りては是等諸道の粹を取りて、其獎を脫す、青年體育の絕好法なり、本書は日比野氏の自著に係り、最も壯快なる詩を撰びて、之が劒舞術を親切に說明したるもの、世の青年諸君先嗜を快とすべし。

洋裝並綴　正價金拾五錢　郵稅四錢
中判二百八頁

野口寧齋君作　（戰詩）

征露宣戰歌

正價五錢　郵稅二錢

國府犀東君作　（戰詩）

伐露樂府 大陸劒歌

正價五錢　郵稅二錢

佐藤六石君作　（戰詩）

征露大捷歌

正價五錢　郵稅二錢

前山口縣知事　法學士　武田千代三郎先生著

心身鍛錬 少年競技運動

全一冊袖珍　洋裝並綴　正價金拾八錢　挿圖六十個　郵稅四錢

▲口繪　楠公士卒訓練之圖……山中古洞君筆

本書は室外教育の理法に通曉せる武田先生の宇內近時の大勢に鑑み、近き將來に於て世界に霸たるべき天運を有する我帝國の少年の爲めに、如何にせば能く其心身を訓練して大國民に欠くべからざる實力を養ひ得べきやの問題を、極めて簡明平易に解說せられたる空前の良書にして、戰時の讀物として、毎家庭に一本を欠くべからざる寶典なり江湖の父兄諸氏子女の家庭に於ける教養を忽にせざらんと欲せば必す本書に依れ

時は維れ春陽駘蕩の時、國は維れ揚武顯義の國、年少氣銳の諸子豈に攸々として貴重の今日を沒了すべけんや、課外の講究を實地に試驗し理科採集に健脚を競ひ體育智育共に全うして此快濶の天地山川を跋涉するの好伴侶を得たるは諸子の爲め大に歡ふべきなり

紅浪 池田米太郎君著

日曜の昆蟲採集

▲洋袖珍正價拾五錢　郵稅四錢▼

●昆蟲採集の揭示●出發準備●捕蟲用具の說明●野外の心得●出發採集●採集昆蟲の說明●昆蟲の躰軀●質問●昆蟲の分類●綠山へ行進●蟻の話●餘興●談話●劍舞●軍歌●歸校●標本製作●教師の挨拶●退散

日曜の植物採集　（二種）

▲洋袖珍正價拾五錢　郵稅四錢▼

●植物採集の揭示●生徒の登校と出發●採集準備第一回講話＝●椿、梅、桑、杉、菜花、密柑、櫻、葡萄、菫、梨、李、牡丹、杜若、枇杷の談話●葉の質問●花の質問●顯微鏡と受胎の話●餘興●第二回講話＝●藤、薔薇、林檎、柘榴、菖蒲、芍藥、百合、百日紅、海棠、麥、茄子、楓、山吹等の談話●根と幹との質問●歸校●標本製作●教師の挨拶●退散

發兌元　東京日本橋本町　博文館

次編豫告

第五編　得利寺の巻　十月
第六編　摩天嶺の巻　十一月
第七編　大石橋の巻　十二月

公爵近衛篤麿君題字
文學博士加藤弘之君序文

巖谷小波君　武田櫻桃君　木村小舟君共編

明治少年節用

全壹冊中判　紙數約六百頁
總クロース　正價七拾五錢
長方形美本　郵稅八　錢

明治少年節用は出でたりこの書には我が東宮仝妃兩殿下をはじめ奉り兩皇孫殿下の御尊影をかゝげ各訂盟國々旗及び日本勳章の等級陸海軍服制等すべて精巧無比なる彩色石版を以て印刷したるもの内容にいたりては鼈頭にお伽噺二十四題、日本歷史、西洋歷史、日本立志談、西洋英雄傳、等を收めまた本文には教育勅語を始め、天文、地文、地理、礦物、農業、工業、商業、体操、遊戲、數學、音樂、軍事、國文、漢文、英語、作歌、作文、俳句、内外事物起原、格言集、福引、考へ物、座敷手品、骨牌法、少年吟誦用詩歌、笑話、養魚法、昆虫採集法、救急療法、學校案内、旅行案内、郵便案内、遊學案内、皇室一覽、皇族一覽、皇統略圖、日本形勢要覽、萬國形勢要覽、和漢洋對照年表、年齡早見表あり日本少年座右の寶典とは即ちこの書の謂也

發兌元　東京本町　博文館

博文館